始

帝國圖書館

金生凝視

綜合教育論

金作之助著

株式會社 平凡社

大正
15. 10. 12
内交

252-330

生命凝視 綜合教育論序

予は教育家にあらず、又教育學者にもあらざる故、金君の此書に就て敢て批判を試みんとする者にあらず、然れども金君その人が眞の君子人にして、重厚誠實の天品に、精到高邁の識量ある事を知る、隨て其說く所の曲學阿世苟くも世に賣らんとするものにあらずして、必ず能く世を益するものなるを知る、今代の頑弊は、一切の事に、偏隔と淺膚なるとに在り、經世も人格も、綜合取要の上に立脚するにあらざれば、勘定あつて錢足らずの愚態に終らん、凡そ人を造り世を經綸せんとする發足點は、先づ教育より振出さゞるべからず、故に教育にして最初の一算を失せんか、世は將棊倒しに亂脈となるべし、教育の根本方針は、取りも直

さず國家經營の根本方針なり、之を高處より見て深處に透達するにあらざれば、國家の萬事は危險なり、偏を脱して圓に住し、淺を去て深に就くは、けだし教育觀の急且つ要なるもの、金君の雄篇は、惟ふに其第一箭を放つものか、予は世人の篤く此書に留意せんことを望みて已まず。

大正十五年六月

田中智學識す

凡例

一、本書は、全く、予が體驗そのまゝの記錄であります。故に、讀者は、何れの部分によつても、私といふものを捉へられると思ひます。

一、本書は、教育に寄せての信仰の告白であるが故に、教育論と銘をうつたが、教育家の專有すべきものではありません。

一、本書は、なるべく、面倒な理論をさけましたが、いはゞ日蓮主義者の告白なる故に、所々に、法華經中心の哲理が挿まれました。その部分は、一般人には分りにくいと思ひますが、その部分をとび越しても、本論の主意をつかむに、さして障りにならないといふことを申し上げます。

序にかへて

子の禱り

ふるさとに、
一人さびしくたらちをの
父のましますその日頃、
安き心のあらなくて、
よる年波に指おれば、
ありしことぞも偲ばれて。

著者より

胸(むね)さわぎぞも虫のしらせか
……危篤のしらせ！

矢竹にはやる心の駒に、
鞭うつひまももどかしく、」
歸りて見れば老いの身の
生死の境にさまよへり。
ア、いかにせんいかにせん。
せんすべもなく涙にくるゝ。
不孝の子！　われ！

くゆるともいまはせんなく、
禱りなり、禱りなり。
禱りの外にすべもなく、
われに、たゞ禱りあるのみ。

禱りのために筆をおこし、
物する夜半のいやつけは、
半(なか)ばなれるころほひは、
父の病は、はや癒えにける。

よる人々は奇蹟を語る。
我は、今
笑顔の父に、
貧しけれどもこの書をさゝぐ。

（大正十五、五、四）

本書は、私を主張せんための主張ではなかつたのである。私は、貧しいながらも、誓願の生活に身を投じて、長い間、父を捨てゝ顧みなかつたのだ。果然、父は病み臥した。齢七十の父はたつた一人で病み臥した。私は、禱りの外になすべきすべを知らなかつたのだ。そして、今、父に捧ぐる何物もない。私は、父をいのるために、また、父への捧げものとして、我が生活記錄を物せんとして筆を執つたが、命、旦夕かとも思はれる父をかゝへて、生活の全部に亘つての記錄は悠長に過ぎることであつた。よつて、その一部として教育生活の記錄にとゞめたのである。私は、本書が、世に押し出す價値のあるかないかを知らない。たゞ、父への捧げものとして出來上つたものが本書である。

幸に、聊かなりとも世を益する所ありとせば、それは、恩師、田中智學先生の厚き御訓陶の賜である。また世を害ふものあるとせば、それは、私の、我武者羅が產んだものである。

をはりに、本論は、螢澤藍川先生によつて、多くの暗示を得たこと、畠山花城兄からいろ〳〵と心添へをいたゞいたことをしるして感謝の意を表したい。

大正十五年六月一日

目次

序論

一、教育圏外からの石つぶて……三
二、教育の轉換を要望す……七
三、淺い了解、深い了解……一〇
四、現代教育は何故に了解を淺薄ならしむるか……一五
五、常識の考察より生命への一乘へ……二一
六、常識の信仰化、信仰の常識化……三五
七、教育界にこの事實……四一

本論

前篇　生命凝視の教育

一、國民教育の本質的內容……五一
二、不思議をたどる……六九
三、教育の要諦……七九
四、貧しい教育經驗……八六
五、所謂、人格教育批判……九九
六、新潮流瞥見……一〇九
七、生命凝視の教育……一三三
八、生命凝視の教育の原理的根據……一四二

後篇　綜合教育論

一、綜合教育といふこと……一七五
二、綜合教育の原理的根據とその輪廓……一七八
三、綜合教育と中心教科……一八七
四、綜合教科としての綴方……一九一
五、綜合教科としての圖畫……二一三
六、綜合教育と書方……二二九
七、綜合教育と唱歌……二四一
八、綜合教育と體操……二五七

九、綜合教育と修身……
餘　論
（以　上）

生命の凝視と綜合教育論

——一日蓮主義者の教育私見——

序論

一　教育圏外からの石つぶて

本論、一名「教育圏外からの石つぶて」と名づける。

私は、青年時代に、教育界の大きい光明とならうことを空想したものだ。小學校の小しやくな兒童が、未來の大臣大將を夢みるが如くに……。然るに、私の性分はあまりに粗笨であつた。そしてあまりに驕慢であつた。のみならず、あまりに野人の特色が度はづれて濃厚であつた。それに、私のにぎつてゐる正義觀念は、馬鹿々々しいほど硬化したもので

あつた。そのくせが次第に増長する。親しい友人は、非常に心配して呉れた。けれども私のくせを知つてゐるもののたれかれは、正面からの忠告の、すべてが無駄になることを知つて、私のなすがまゝにまかして呉れた。なかには、やんわりと忠告することを忘れないものはあつた。私は、夜、その友と二人で山道を語りながら通つたことがある。友の曰く「あなたは、馬鹿につよがりを見せる。何もそんなにする必要もあるまいに……。あなたは、いが栗のやうだ。外面は、さはればいたい。けれども、そのなかには、美しい粒栗がある。皮をむいて、しぶをとれば、うるはしい味がする。味を賞告する必要もないがあくまでもいが栗で頑張る必要もなければ、また、頑張ることはよいことでもない」と。雨あがりの山道は、足のさはりが馬鹿によい。秋なれば、空氣が澄んでゐる。道に覆ひかぶさつた木かけをぬうての道中なれば、暗さは暗し、然れども、見えない樹木も秋の氣をたなびかせて物かなしさを思はせる。つよがりやの私も、この時ばかりは、つよがりを

示す目標もなければ、友のやさしさに打ちまかされて、素直に反省したこともある。然れどもその反省は、私の生活をひつくりかへすほどのものでなかつたのである。日にてらされゝばまたもとのつよがり坊になつてしまう。私は遂に教育圏内におかれる人間でないまでに、私の教育主義を盲滅法に、傍若無人にふりまはした。強い壓迫が來れば、內心怖氣を催しながら、怖氣が大きければ大きいほど、大きいつよがりを見せた。そして伸ばし得る極度まで伸びて見やうといふ氣をはけましました。「臆病といふものは強いものである。」この不思議な斷定は、往々見られることである。物のおもしろ味はこゝにある。弱きもの必ずしも弱くない。強きもの必ずしも強くない。因緣和合しての強さであり、また弱さである、因緣が別の狀態におきかへられれば強さはどこまでも強さでなく、弱さはどこまでも弱さでない。この理が次第に展開して教化といふことに味が出て來るものでなからうか。

さて、私は、極く素直に教育圏外に投け出されたのである。私は今、この教育圏外に立

ちて、手ごろの石つぶてを握つてゐる。抛つて見たくつてたまらない。而して、私は決して修羅の處ではない。極めて自由に、極めて柔輭に、極めて平靜におかれてある。私はたゞ、私の握つてゐる石つぶてを抛ることによつて、教育圈内に如何なる波紋が描かれるであらうかをためして見たくつてたまらよい。よしや、湖心のなかにふら〳〵と沈んで、それきり何の用をなさないでも、私には何のかなしみもない。若し私の石つぶてが、少しでも動搖をおこすやうであれば、私は、次ぎの石つぶてを捨てゝ、寧ろ身を以て飛び込んで見たいものである。物は、離れて見ればなつかしいものである。荒めば荒むで、すたれゝばすたれるで、心をひかされるものは、もとの住家である。荒波にかき消されてもくやしくもない。うらめしくもない。要はたゞ、聊かでも、廣まる波紋を見ることの期待が興味である。

二　教育の轉換を要望す

世の中で普通事とされてゐるものは、大概は臭氣を發するものに思ふてたいして間違がない。政治然り、實業然り、藝術然り、教育もまた然りである。凡そ、事あれば臭氣があゐる。たまに臭氣なきものがあれば、それは適用しないといふ傾向にある。たゞ如何にしてその臭氣を巧妙に塞ぐべきかの苦心と要領こそは、現代人の常識には、不思議でもなければ怪訝でもない。それは、あまりに當然過ぐるほどの當然で、それは問題になり得ない問題だ。若しも、それを問題にするものがあるとせば、それは餘程の突飛者であるのだ。かう考へて來ると、現代は、將に突拍子のあらはれねばならぬ時である。而して、小さい突飛は、ありあまるほどある世の中だ。これ、大きい突拍子を要望する聽の動搖ではなから

うか。法華經に、「大地六種に震動す。」とあるが、今は將にその時でなからうか。鬱の大地か動搖して、突拍子の文化のあらはれねば、仕末に終へなくなつたのでなからうか。現代人の焦燥は、これ、突拍子を呼ぶうめきでなければならない。突飛可なり、突拍子可なり、要はたゞ、人類の圓融の生活にまで通ずる一乘であるかどうかの吟味を誤らねばよいのである。圓融の生活は、人類の最高最極の生活であるからである。政治でも經濟でも、學問でも藝術でも、教育でも宗教でも、この標準をはづれるならば、それは皆地獄の業であるといふことは、明瞭すぎるほどの明瞭さである。

さて、現代人は、一般に教育をありがたがる癖をもつてゐる。學校の門をくゞらないものは、無下にかろしめられるのが一般だ。しかしながら、現在の教育は、受けるがよいか受けぬが增しか、一寸考物である。なぜなれば、知識と知識との競合ひ葛藤、名利の欲の止め度ない發展、それが現在の教育の成果ではないか。學問教育、日に月に盛んにして邪

見愈々強盛に、邪想は惡心を產み、惡事益勢を逞しうし、世はあげて惑亂に惑亂をかさね修羅の巷を現じ、無間地獄に墮し、阿鼻叫喚見るにも聞くにも堪へないのである。理窟はいかに巧妙でも、理論はいかに正しくとも、最後の正確な審判は、現證にある。理論と現證と齟齬した場合は、いかなる理論もびた一文の價値もない。現證あれば、何物も否定することが出來ない。然るに「辛きを蔓葉に習ひ、臭きを溷厠に忘る」の例にもれず、世はあげてこの現證に目もとゞめず、ひたすらに、六道の巷をさまよひつゝあるのである。而して、蔓葉を辛しといひ、溷厠を臭しといへば、これは、常識の圈內から排けられ、突飛のなかまに押しこめられるのだ。「善言を聞いて惡言と思ひ、誘者を指して聖人といひ、正師を以て惡侶に擬す」の大聖の言、よくもあてはまつた世の中といはねばならぬ。學問も教育も、宛然、火に油を注ぐやうなものである。どうなりかうなり、教育の轉換は、焦眉の急に迫つて居ることは、論も沙汰もあつたことでない。かうなつては、最早グツ〳〵

して居られぬ。法華經に所謂「餘乘の若しは二、若しは三ありとも」、所詮は、混濁に混濁を導くやうなものであるから、「正直に方便を捨てゝ唯一乘」法の事現にまつより外の道がないと仰せられた佛陀の指南は、遠く現代を指したものであるとの法華經の文證あればあるほど、心あるもの〻悲痛なる叫びであらねばならない。

今は教育の一大轉換を試みねばならぬ時である。

三　淺い了解深い了解

私の、かなり親しい接觸をもつてゐる十數の青年がある。

しんみりした會合がしば〳〵開かれた。中等教育を受けたもの三四名を除くの外は、大がい小學校の教育さへ碌におはらない人達である。私は彼等との接觸によりて見逃すべからざることを發見した。それはまことに思はしくない眉をひそめても足らない事である。

高い教育を受けたものは、高ければ高いほど、流石に學問も知識も豐富だ。讀書力には一見比較にならぬほどの相違がある。當然のことである。さうあるべきことである。然るに、了解の點になると、却つて、あべこべの結果を見ることが往々に見られたのである。私は痛切に感じた。現在の教育は、受けることの期間に比例して、物事に對する深い了解が、次第に失はれる大體の傾向にあるといふことを思はされるのだ。現代の教育に、中毒しないだけの健全なる頭の持主は別として、なみの頭の持主は、どうしても現在の教育によりて、不知不識の間に、淺薄にならされてしまうように思はれてならない。私はこゝに於て一つの冒險を試みた。

私は、彼等に、彼等の力で仕末し終せないと思はれるほどの、可なり高等な宗教書を讀ませたことがある。その告白に曰く、比較的高い程度の教育を受けたものは、期せずして

一讀んでも分らない。結局無駄である。」といふことになつた。而して、中等以上の教育を受けもせず、現代の文藝物、思想物にあまりかぶれないものは曰く、「分るか分らないかさへも分らないが、勞働の餘暇に、二枚なり、三枚なり目を通してゐるが、何だか或る力にふれてゐるやうな心持で、いやだとか、無駄だとかいふ感じがしない。たゞある緊張を覺える。」といふことであつた。

それから三四ケ月過ぎて、或る夜更けのことである。その中の或一人が、息をはづませて、あはたゞしくやつて來た。彼れは、興奮しきつてゐる。思ふことを話し得ない苦しみが讀まれた。「どうしても……、どうしても……」とくりかへしても、次の句が出ない。「どうしたんだ。」と口を添へると、漸く話せた。「だん〳〵讀んである中に、何だか知らないが、大きい力といふことを感じた。だが依然として分らない。分らないが或るかゞやきを覺えた。生活の意義はこれだなと感じた。而してそれはどういふことかはつきりしな

い。たゞ讀んでる中は、これが我々共の眞實の生活でなければならない如くに感ずる。私は、何か役に立つことをせねばならぬ。今までの生活は悉く地獄の業である。今までの家業も生活もおしくない。意義ある生活にふみ込ませて下さい。」といふ意を、漸くにしてつぐはぐな言葉をもつて語りおはつた。彼は、それ程興奮して居た。それほど感激も強かつたのであらう。こゝに機微がある。機微とは妙味だ。「分らない感激！」といふことはありさうに思ふてゐたが、私は今それを探りあてた。これは全くその事實ではないか。圓融生活の根本原理はこゝに潜んでゐるのである。佛教の最高最深の原理である「一念三千」とはこれであらう。教育の理想も原理も術も方法も、皆こゝに根をはつてゐるのでなからうか。つかみ得ないまでに感激が深まらなければ、感激と感激との間にさへ競り合がうまれるでなからうか。

さて、私は、それをおさへた。何ぜなればそれはまだ感激が整つてゐないからだ。整つ

た感激には、おそれもなければならない、かなしみも伴はなければならない、なやみもなければならない、執着もなければならない。而してそれ等が、それ〴〵處理されてなほとめ度なく湧いて來る感激でなければ本當のものでない。おさへておさへてもこみ上げて來る感激でなければ脆さがある。生えぬきのものではない。

彼は、それから半年餘を經過して、世人どもを驚倒させるやうな意氣と決心とを以て、近親同志の、二十年來の繋爭のなかに飛び込んで、双方からの惡口雜言、近隣からの嘲笑惡罵の中に立ち、家庭のもつれに涙をのみながらも、汗と血にかたまつた貯蓄の全部をなげうちて、彼は、遂に歡喜の微笑を浮べた。二十年來の骨肉の中のわだかまりは遂に解けた。「分らない感激！」これあつてこそ、

「八紘一宇」

「六合一都」

の日本國體の理想も實現するのだ。佛陀の大誓願も實るのだ。

また、彼等にある話をした翌日、その中の一人から、「あの人達は、（高い教育を受けた人達をさして）知識として自分の仕事に役立てるために聞いてゐるやうに思はれるが、あの態度は、どんなものでせう。」といふ意外な問をかけられたことがある。鋭い直觀によつておのが世界をひろめ、深めてゐる彼等から、この言を聞くからには、全部本當でないまでも、確かにその傾向にあることを思はせられた。

四　現代の教育は、何故に了解を淺薄ならしむるか、

現代の教育は、受くる期間に比例して、了解が次第々々に淺薄にならされるやうな傾向にあることは、事實に徹して明かである。私は今、那邊にさうならしむる理由があるかを

考察して見たい。

私は多岐にわたつたことはいはない。たゞ一事にのみとゞめたい。それで澤山だ。すべては一から出た多である。ものには中心がある。要がある。根元がある。それさへとつつめれば、すべてが埒があくではないか。現代の教育の、最も大きいわづらひの原因は、「凝視の力」が閑却されてゐるからによるのでなからうか。凝視が利きさへすれば、淺薄が宿らう筈がない。教育界に、「伸ばす」といふ名辭が、廣く分布されてゐるが、「深める」といふ名辭が分布されてゐないといふことは、確かに重大なる症狀ではあるまいか。近い話が草木を育てるにしても、土を耕すこともなさねばならぬ。肥料も施さねばならぬ。剪枝も必要だ。土を耕いて根を深め、枝を剪るは無駄を捨てゝよきを得るにある。肥料を施すは、伸ばし而して充實せしめるにある。肥料を施せば伸びる。さて徒らに施したでは伸びても充實しない。充實せねば自らを支持することさへも叶はないで、一朝にして伏し倒れ

實り所か、腐敗してしまう。施肥にも加減がいるが、その加減ばかりでもいかない。根を深め、懐を廣くして、施された肥料を自由自在に處置し、これは根、これは莖、これは葉、これは實といふ具合に、適當に養分を鹽梅して、すべてに行き亘りて充實をはかる。それでも無駄な枝葉が出れば、それは剪枝を行つて、完全に近い機能が、かくして行はれる。人間の敎化もまづこのやうなものだ。徒らにのばして喜ぶは、青田を喜ぶやうなものだ。「人の子と青田はほめるな」といふ諺が、田を作るもの〻金言とされてゐるが、全く味うべきことだ。懐の廣い、そして深い根が、施された肥料をば、自由自在に處置するやうに、人間も、深い凝視めが利いて、自由に己れを處置し、自在に物事をさばき得られる境地に住せしむれば、如何なることでも御ざんなれで、剛くもなれば、柔くもなり、變通自在の人格があらはれて、つまづきもせねばひるみもしない。而して、にじみ出る惡癖は、剪枝するやうに、荒療治を人が加へるか、自らがなすかせねばならぬ。伸ばすばかりも能

でない。然るに現代人の心理は、漸く「伸ばす。」といふことの虜となり、氣隨氣儘にふるまうことを自由と合點し、放逸、怯惰、柔弱、驕慢にして、節持なく、節操なく、禮なく、恩なく、而して圓融なく、したがつて中心をなみする傾向が次第に濃厚になりまさつてゐる。この事實を前に、世は猶ほ平然としてこの歩みをつゞけてゐることのいかにもなげかはしいことでないか。人生はなぐさみではない。教育はおもちやでない。人生に圓融の世界を展開せしむる鍵は、あさくさぐつたではありやう筈がない。深く〳〵探らねばならぬ。そのためには、凝視めるより外に道がない。凝視の利いた所にのみ生命の躍動があり、生命の囁きを聞くことが出來るのである。私は今、教育の要諦について、日蓮聖人の言葉をかれて、私の了解を、率直に告白し、說明は後に讓ることにする。

觀心本尊鈔に曰く、

「天晴れぬれば地明なり、法華を識るものは世法を得べきか。」

法華とは、一念である。生命である。

世法とは、善惡三千の色報である。煩惱である。一念動搖して、所緣の境に、善惡三十の波と寄せ、色報の泡沫を現ずるとも、よせてかへすは波のならひ、再び寂靜の一念に歸し、一念卽三千、三千卽一念となりて、天地冥合、法界一體圓融の實相觀み遂ぐるをば、「生命の凝視の徹底」とはいふであらう。天晴地明といふも他事ではあるまい。

然りと雖も、一念三千を識らざるものの處置をかへりみざれば、大慈も大悲も、羊頭をかゝげて狗肉を賣るといふものだ。この處置をば如何かすべき。これなり、これなり。

又、觀心本尊鈔に曰く、

「一念三千を知らざるものには、佛、大慈悲を起し、妙法五字の袋のうちにこの珠をつゝみ、末代幼稚の頸にかけさしめ給ふ。」

五字とは、妙法蓮華經である。生命である。

珠とは、一念三千である。圓融である。實相である。

珠をつゝむとは、南無妙法蓮華經である。生命がけである。一念三千の珠をつゝんで與へられた妙法五字の袋をば、生命がけで見まもることが南無妙法蓮華經でなければならない。いひかへれば、生命がけで生命を凝視めることであらう。この觀方を、私は南無妙法蓮華經の一面觀として動かぬことゝ信ずる。われ等は、生命を凝視めるごとに、生命をおほひかくす叢くもが、一層また一層と、次第に吹き拂はれて、自我の光明、次第にかゞやきを增し、迷悟境を異にするに至るであらう。學問でも教育でも、政治でも宗教でも、すべて、徹底した生命の凝視によつてのみ、眞の開顯が遂げられるであらう。生命の眞の躍動はかくして得られる。而して、その躍動のまゝに、生命を惜まず躍進することが南無妙法蓮華經でなからうか。かくして、私は、教育の要諦は、生命の凝視から踏み込むにあると思ふのである。

五　常識の考察より、生命への一乘へ

常識とは、世の中にまんべんなく行き亙つてゐる一般的知識であるといひ得よう。別段きまつた推理形式をたどらずともお互が扱ひ得られる、畢竟するにその時代の社會意識といふたやうなものである。故に常識談道といひ、常識判斷といへば、別に深い考慮を煩はすことなく、甲も、乙も、丙も、丁もといふやうに一般人の意識の上に、特異感をもたらすことなく普遍化された性質のものである。かう考へると、常識といふものは、非常に淺薄なるものになつてしまう。而して、常識は或は輕蔑され、或は侮蔑されるのである。しかしながら、常識はいはゞ地盤である。したがつて常識をくつがへすといふことは、最も至難なことである。なみ大抵の力のよくなし得ることでない。常識に衝突する時、そこに

は必ず渦が卷く。大きく衝き當れば大きく、より大きく突き當ればより大きく。常識とは偉大なる力の名である。

常識!!　汝の名は力である。古往今來、この常識に呑み込まれたもの、呑み込まれるもの、幾何あつたであらう。幾何あるであらう。文化史上の流血は、一面、常識の迫害によることが多いといひ得るでなからうか。佛陀の受けた迫害、基督の受けた迫害、ソクラテスの受けた迫害、さては日蓮の受けた迫害、凡そ殉教の悉くは一面常識の迫害である。如何に貴さを持つてゐても、如何に深さを具へてゐても、如何に嚴肅さに滿ちてゐても、識といふ識、どんな知識であらうとも、眞に威力を發揮し得る時は、それは常識化した時である。如何なるものでも、常識化したもの〻前にはきまつてたじろがねばならぬ。勿體ない、おそれ多い、情ない極みではあるが、二重橋前に革命歌を高唱するものが別段わるびれもせず、遙かに皇城を拜するものが却つて、右顧左眄周圍に氣兼するといふやうな轉倒

した事象は、全く、社會意識即ち常識が、最早や、マルクス主義によつて漸く織りなされた證左でなからうか。常識とは、しかく底力のあるものである。善につけ惡につけ、老媼も杖にすがつて立つといふまでにならねば、眞の威力が發揮されない。そのためには常識化が先驅であらねばならぬ。

さて、私は「常識化」といふことを「平易化」と速斷されることをおそれるのである。人間たれしもたやすいといふことを好まないものはない。しかしながら、たやすさを追ふことばかりも人間の能事ではあるまい。たやすさに瞞着されて、生命の殿堂にふみ込むこともを得せず、徒らにその周圍を徘徊して、其の美をはるかに讃歎する法悅を程度とする易行の法門、やれ極樂、やれ天國と憧憬を玩弄することは、われ〳〵にとつては、恐るべき陷穽である。人生行路、難易は問ふ前に、まづ、生命の殿堂に通ずるや否やの問題であらねばならない。難易を問ふ前に、まづ、生命の殿堂に佛陀自らが、本懷の經なりと、念入りに宣示さ

れた法華經に、

「諸佛の智慧は甚深無量なり、その智慧の門は難解難入なり。」

と覺悟をうながされた。「喜んで難につく。」といふことが、社會人心の地下水となりて、人人の心を潤うし、その心の噴騰により生命の渦を醫すにあらずば、世界は永久にうめきを絶つことが出來ないであらう。

「喜んで難につく。」

これなくして人生行路のスタートがきりにくい。

又、法華經に曰く、

「舍利弗(よ)。如來は但(ただ)、一佛乘の故に、衆生のために法を說き給ふ。餘乘の若しは二、若しは三あることなし。」

と。一佛乘とは生命への直行である。餘の乘の若しは二、若しは三、四……あるとも生命

への直通でなければ、部分部分の運轉であるものを、それとも知らずに身をまかせてゐる所から產み出された今日の惑亂ではないか。一トすぢが現下の問題である。

この一佛乘をはづしては、いかなる賢人の集合でも、聖人のよりあひでも、究竟の大安樂境を齎らさないこと必然である。一佛乘である、たゞ一佛乘である。已れ一人の涅槃完成を願つて、それにのみ沒頭してゐる自己完成屋のしみつたれな考で、どうして自我の光明も、己れの禪定もありよう筈がない。

「一人の成佛堅く無用、國と共に成佛すれ」

とのいましめ、何といふ大きい警告であらう。

日蓮、立正安國論に曰く

「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに實乘の一善に歸せよ。然らば則ち三界は皆佛國也佛國其衰へんや。十方は悉く寶土也。寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく、土に破壞な

くんば、身はこれ安全にして、心は是れ禪定ならん。此詞、此言、信ずべし、崇むべし。」

と。しみつたれなことは何事でも排さねばならぬ。況して、人間の生命に直面した場合に於てのしみつたれをやである。早い話が、國土をはなれた己でない。また己れ一人の國土でもない。寸心な信仰ほど人間社會を毒するものがない。譬らば佛國土である。たよらば實乘である。實乘とは一佛乘である。生命への直通路である。圓融への大道である。道義統一の正義である。私は、この詞を拜誦する時に、何時も、きまつたやうに思ひ浮べることは、當世の人氣者マルクスである。あの眞面目で、あの熱烈さで、あの根氣で、あの鋭さで、あの氣魄で、あの男のなかの男らしさで、佛國實土まで目さきがきかないで、唯物にとぐまつたといふことは、運悪く階級闘爭といふことが、思想生活の基調となつたためでやむを得ないことであつたらうとは思ひながらも、彼れマルクスにして若しも、「(佛)國

に衰微なく、(實)土に破壊なくんば、身はこれ安全にして心はこれ禪定ならん』の詞に接したとならば、一讀彼れの目は底光りがし、再讀忽ち瞑想の世界に遊び、三讀彼は卓をうち、席をけつて狂喜亂踏、漸くにして、聖者日蓮の前に三拜九拜措くことを知らずに、天晴法華經の行者になつて、現在に深重なる罪障を殘さずに濟んだことであらうものを。彼マルクスは、誤つて階級闘爭に目が眩み、唯物史觀に沒頭し、遂に、大事の日本國體をも月並の國家としてのろはしむる發頭人となつたといふことは、諸事すべて因緣の然らしむる所とはいひながら、敬慕するマルクスのために惜しくつて惜しくつてやる瀬がない。私は、マルクスの弟子と名乘らんものに、あなた方の目の上のこぶである日本國體をば、目の上のこぶなるが故を以て、敵中に間牒を放つやうな心持ででもよいから、兎に角周到なる用意で研究に指をそめて見たらいかがなものであらうことを熱心にすゝめたい。あの、鋭いマルクスの靈が、若し地下になほ文化の變轉推移に注意してるたとしたならば、おの

が弟子どもの亂踏亂舞をいかに口惜しく見てゐることであらう。此點に早くも氣のついたのに、獨逸社會黨の機關誌「進め」のメーブスといふ記者がある。いはゆるマルクスの使徒なるもの、いたづらにはやらずに、民衆の幸福のために、否、全人類の幸福のために、少し落ついて考へて見られたい。メーブスが二人三人……と出て來たら、曉のそよ風が、次第々々にひんがしに疊み重つた黑雲を拂ふが如くに、法華の妙理が日本國體の旭光となつて、地上にまで投げかけられるであらう。法華の妙理とは、生命への一乘である。それが實乘化したものは日本國體である。法華とは、日本國體をひめた哲理である。日本國體とは、政治を看板にした法華の妙理である。そこまで、凝視めつめた日蓮聖人が、その凝視めつめたそのまゝを全人類のためにおつかぶせて、あらゆる教化者の失敗の轍を一手にひきよせた。いやも應もなく、憚らもおそるゝも、逃ぐるも避くるも一網打盡、百把一束にからげて我他彼此言はせず、救濟網を敷かねば、埒があくまいぞとの大抱負をば、率直

に宣示したのが、前の立正安國論の一節である。この宣言と神武建國の詔勅とは、裏表である。これは、マルクスの、「世界の勞働者團結せよ。」の悲痛な宣言とは、その手巧に於てもその規模に於ても雲泥である。質に於て屑壤である。日本國體は道のために立ち、マルクスは食のために爪牙をとぐ。而して、今や、マルクス主義は將に常識化して、人類は怒號酸鼻に咆哮叫喚しながら勢にまかれて、囚れより脫し得ずと雖も、由來人間は、食の器にあらざれば、目覺れば道の饑渴に氣づくべく、日本國體が、次第に人類の常識の上に、崩えきざすべきときは將に來たのであらう。來らねば來らしめねばならぬ。生命への一筋を常識化せしめねば世は闇黑で終らねばならぬ。動搖がやむべくもない。

この項について、まう少し考察をすゝめて見る。人間すべての、息の根を絕たない限りの目が飛び出やうが、口が塞がらうが、欲する人も欲しない人も、いやでも應でも法界の大管弦樂の樂手とならずに濟むべきことでない。やれ解脫だ。やれ涅槃だ往生だ、禪定だ、

さては自由だ平等だ、博愛だ共存だと、それ〴〵思ひ〳〵の所に沒頭して、おのも〳〵、
それ〴〵の安住法悦があつたにしても、惑亂の中には眞の安住法悦があらう筈がない。眞
の安住法悦は、法界をあけての大管弦樂でなければならない。その理想のゆゑにのみ建て
られたる日本國體、故に一大事因緣の國なのだ。一大事因緣の國ありて一大事因緣の法が
ないといふ筈がない。

法華經に曰く、

諸佛世尊は、たゞ一大事因緣を以ての故に世に出現す。

一大事因緣の國！　大日本國

一大事因緣の法！　妙法蓮華經

此の法ありてこの國あり

國は法を呼び

法は國を呼ぶ

呼びつ呼ばれつ三千年

なほ幾年か

血を吐く思をつゞけるであらう

予は知らず〳〵この咏嘆をしるしてしまつた。

さて、現代人は、これを痴人の夢、一片の架空談位にしか考へないであらうが、まてし
ばし、

空とぶものは

鳥と羽虫と

さう考へた時もあつたつけ

さて
人が飛ぶ
飛ぶも飛ぶ
鳥の通はぬ
八丈ヶ島へ
それよりも
もつともつと遠く
世界中を飛び周る
この間ゟ
世界を半周したものがあつたつけ
そしてそれは

日本人といふことだつた。

予は、またこの咏嘆をしるしてしまつた。いはゆる痴人の夢といふものは、さう馬鹿にされぬものだ。いはゆる一片の架空談は、まざ〳〵と本物とはやがはりすることもある。ことには、大痴人の夢、大架空談となると、我々どもの分際で所有してゐる衡(はかり)には、なか〳〵にのせ得ないのだ。某大學教授といふいかめしい現代人のチヤキ〳〵が、ジヨウダンでなく、本氣に、開き直つて、法華經は、一片の架空談に過ぎないと嗤呵をきつたことがあつたが、日蓮は、法華經をば、

「疾く言ひたらんには政道の法ぞかし」

と斷ぜられた。同一物を、某教授はまぼろしと見、日蓮聖人は現實も現實、あらゆる現實を綜合して、骨と肉で積みあげて、血と涙で動く政治の根本原理と見られたのだ。何とお

もしろい對照ではないか。山に高下あり、河に長短あり、水に淺深あり、その差等は、可なり著しいものもあるが、如何に大きい差等があらうとも、人間の智慧ほどの差等は先づあるまいと思はれる。人間は謙讓にてあるべきものだ。智慧の實は食ふべし、食ふて味はうべし、味はねば酸いも甘いも分らない。日本國體をかみしめて見れば法華經の味がする法華經を嗅いで見れば日本國體の香がする。そしてそれは、己が生命の正體であり、世界を擧けての圓融相であるのだ。日本國體は、坦々たる生命への一乘であるとの斷案は、出鱈目か、眞面目か、兎にも角にも大きい問題であることを私は極力提唱する。この一大事を夢物語、架空談位にしか考へられないといふことは、いかにも無邪氣なことである。無邪氣はある場合は愛嬌でもあるが、人類明闇の分岐點に立つての無邪氣は、愛嬌などと笑つて居られない。現代人は、火宅の中に嬉々として遊び戲れてゐる子供のやうなもので、無邪氣もこゝまでになれば、放つておかれない。現代人の常識轉換は、今が潮時だ。常識

は信仰化せしめねばならない。信仰は常識化せしめねばならない。教育は、此點に全責任を負はねばならない。

六　常識の信仰化信仰の常識化

常識が、常識のまゝに動いてゐるうちは、世は闇でおはらねばならない。

常識なるものは、主に五管によりてのみ立證され、首肯される所のもので、いはゞ人間の靈の表皮である。たとへば、盲(めし)いた人の手さぐりのやうなものである。而して、朦昧なる人間までも譯なく肯定し得る低級さと、大勢にまかれて、邪をもあたりまへと見まがうやうな錯覺的な不確實性とを屬性としてもつて居る。いはゆる此頃の常識なるものに於て殊に然りである。

盲の手さぐりは、時には目明きの注目よりも數等の確さを持つてゐるが、さて、それを以て盲の讃美者となり、また盲を希望するものは、ありもせねば、またあつてはならないことである。佛のたとへられた群盲の象は、この五管を唯一の手よりとした、佛教では、最も低級なる知的作用である六識＝視覺・聽覺・嗅覺・味覺・觸覺の五管とこれを統融する知的作用とをかく名づけるのである。＝これを諷するに、最も巧妙を極めたものである。

而して、古來聖人賢人なり、先覺者なりによりてあけられた世界改造の烽火が、多くは水中の屁のやうに葬られたといふことは何であらう。こゝに常識の偉大なる力を認めねばならないけれども、常識はあくまでも常識である。靈の表皮である。地球に譬へれば地殻だ。その靈の表皮が靈の全力用であると考へたりしたでは、地殻が地球の全部だと考へると同じことで、馬鹿らしいといふ感じよりも、寧ろお目出度いといふ方が濃厚に感じられる。問題はこのあたりから産みかへされねばならない。此頃の人間社會は、毒々しく、闇

く、凄慘で淫蕩な、靡爛した、我利々々の放縱なるそれ〴〵の色彩で塗りつぶされた常識といふ鎧を着て動いて行く。これが末法濁季の當然と相場をきめて見ても、人間の靈性のすべてを閉塞してしまう譯には行かないのみならず、その殻が、あまりに硬張つて來ると、それが却つて靈性爆發の誘引とならねばならぬ。我々どもの期待はそこにあるのだ。靈性は次第に搖ぎかけて來てゐる。空飛ぶ鳥が鳴けば、籠の中の鳥も默してゐない。籠の中の鳥が鳴き出せば、空飛ぶ鳥はまたもなく。法華一乘の妙理、その事現たる日本國體の正義の叫を擧げるべく、社會は準備を促してゐる。この叫びを高唱さへすれば、失神したやうに見えても、三千年間錬へられた國民性であるから、はずみさへあれば、堀つて〳〵一層突突いて噴騰する石油の如く噴騰すること必然である。而して、常識はその時、靈性のかやきにあうて、明くもなれば、豐かにもなるのである。從つて正しいものになるであらう。こゝに常識は信仰化して來るのである。常識の信仰化といふたとて、さう六敷しいこ

とではない。神武天皇が、天祖の御理想を奉體して、いよ〳〵事業の上にこれをうつして、八紘一宇、六合一都、卽ち四海一家の洪謨を以て、まづは、日本國を建設し、兎角におさまりのつかない人間世界をば、次第々々に整理すべく、法性自然の顰を以ててらし、法性自然の慶から流れ出るさばきを積んで、而して養はれた民族は、建國の洪謨の擁護者となりて、そのために自我を沒する誓願の生活に這入つた。そこには何等疑心のあるべき筈なくまた不思議もない。そのために生命を賭してやる事は、極くあたりまへのことだ。誰彼の別なく、耕すものも織るものも、描くものも書くものも、秩序整然、自他彼此の心なく億兆一心、あらゆるもの〻一切は、悉く皆この洪謨に朝宗するように社會意識が醸醸すれば、それは常識が信仰化したのである。その上は、それを味識すればするほど、慶がにじみ出る、輝が增す、正義の力が張る。日本國は、この規模で產れたのだ。而してその規模を範とらしむればよいのである。一度靈性が呼び醒されさへすれば、かういふ狀態が

忽ちに顯出するのである。

古聖曰く

「邪見いよ〳〵たのみあり」と。

これは、邪見がそのまゝにたのみになるといふ譯ではないが、邪見まで高するには、靈の惱みも悶えもそれ相當に伴つてゐるのである。而して、惱みを感じない惱み、悶を感じない悶え、それが邪見である。從つて靈性は、自然におびやかされてゐるによつて、あるはずみを食へば、忽然として、すべてが信仰化するといふ譯だ。邪見のたのみある所以はこゝにあるのだ。日本の現狀は、强盛なる邪見におほひかくされてゐるだけに、なやみもまた鬱屈してゐる理である。今がそのはずみ時でなからうか

政治も宗教も、教育も藝術も、ありとあらゆる文化生活は、この的をはづし、このはずみを失つては、地獄の沙汰である。

日蓮、「開目鈔」に曰く

「善につけ惡につけ、法華經を捨つるは、地獄の業なるべし」

このきつい斷案を味はつて見る氣にならない中は、常識のまゝの常識圈內の囚人と見るべきである。人間世間は、最早や、愚痴々々してゐられぬ。我等は、別の才覺を交へず、法華一乘＝生命への一乘を急がねばならぬ。急がしめねばならぬ。而して全人類は、手をとり合つて生命の殿堂に急がねばならぬ。日本國體は、この規模によりて建設せられた。この事實に直面しながら、これを信じられないとならば、西洋中毒のありがたさかも知れない。

難解難入の一佛乘、而してその常識化。この途轍もなさそうな問題、私はしかく簡單に片づけた。けれども現代人にとりては難關中の難關であらねばならぬ。なぜなれば、靜かに理性によつてさばき、飽くまで論證的にならされた現代人に向つて、私は、論證ぬきに

グン〳〵と生命の叫びそのまゝを提唱したからである」此點は後章に於て、少しでも論道することを申上けてこの項を結ぶ。

七　教育界にこの事實

ある日、突然、某專門學校の一學生がたづねて來た。そして藪から棒に、本當に藪から棒のやうに、

「日本國體は、本當に貴いのでせうか。」

私は、少なからずびつくりさせられた。彼の眉宇は、異樣に緊張してゐる。笑のうちにといふ彼の努力も、この緊張をかくすことが出來ない。

私は、一ト先、「本當に貴いのだ。」と簡單に片つけておいて、さて、「それは、どうした

所から湧いた疑問か」と反問して見た。彼はいふ

「實は、今日學校で某博士を招いで、修身講話を聞かして呉れたが、その話を聞いて、私は、路を迷つたやうな心持になつたのです。」

といふことだ。折角の博士の修身講話が、學生をして新たに迷はしめたではなからうか。迷を解き得なかつたのは事實かくの通りである。博士は、哲學、倫理學等について、かなり深い造詣があるさうだ。そして文部省あたりから、または地方の教育會などから、思想講習などによく聘される方の穩健篤實なる學者であるといふことも聞いた。

博士の話だといふによると、福岡縣の或る學校の兒童が、先生にむかつて、

「草鞋は、古くなると破れて一文の値打もなくなる、草鞋ばかりでないすべてが古くなると廢物になつて價を失ふが、日本國のみは古いから貴いといふ。どういふ譯でせう。」

と至極な問題を提出に及んだといふことだ。福岡縣は工場都市の多い所だ。したがつて、

勞働者氣分が澎湃としてみなぎつてゐることであらう。例をば、ものもあらうに草鞋にとつたなどはおそらくその邊からきざしたものであらう。兒童の疑ではないと見た方が穩當らしい。それはさておいて、困つたのは先生である。この場合困らないやうなしつかりした信念の持主である先生ならば、かういふフザケた質問の出る隙がない筈である。この質問は好意に見ても眞面目ではない。揶揄の氣分が濃厚である。而してそれは兎も角としてこの場合、先生はどう答へたか、どう扱つたかゞ問題の焦點である。先生の答がふるつてゐる。曰く、

「實によい質問だ。私も考へて見やう。」

といふことであつたさうだ。それで濟んだ。よい質問とは、何といふフザケた態度であらう。これをフザケたでないと見る國情だから、國が年中我多彼此するのだ。日本國體の無上尊貴を、天祖の御理想を、神武の洪謨を一片の形式儀禮の御言葉位にしか考へ

られない深さしか持つてゐないから、よい質問などいふことになるのだ。言葉と言葉との應酬が、教師と兒童との仕事位に考へてゐる態度は、どう見ても巫山戯てゐるとしか思はれない。でも、これに明解を與ふべく先生の苦心されたことは買つてやらねばならぬ。この先生は、教員中での優良の部であるかも知れない。先生は、この誤らざる解答を得べく、遂に郡視學迄相談に及んだ。郡視學先生も、生憎これに對する確信の持合せがなかつたと見えて當惑した。そこで講習のために、東京からはるゞ〳〵乘込んで來る博士を待つて質問に及んだといふことである。そこで博士の曰く。

「日本の國は、この國のもつてゐる内容が貴いから貴いといふのでない。」

と。この説明で解決がついたといふことであつたさうだ。しかし、私は、これでも何だか腑に落ちなかつたので、急がしい時間をさいて持ち込んだ問題なのであらう。私は思ふ。博士のことだから御自分一人分りで、言葉を略したことでないかと思ふが、若し果して、さきの説明にあらはれた通りで、この次に續く言葉を略したでなく、「古い」と「貴い」といふことの間に何等かゝり合がないといふ御意ならば、ゆるすべからざる問題である。

問は、「古い」といふことゝ、「貴い」といふことゝが、どんな關係におかれてあるかといふことである。いひかへると、「古い」といふことゝは、その内容に於てどこかに通ずる所があるかないかといふ問題である。若しもこれを一般的に見た場合は、内容に於て通ずるものもあり通じないものもある。手取り早い話が、草鞋などは、古いからといふて、別に内容に價値づけられるものでないことはいふまでもないが、日本國といふ上に「古い」といふことを當嵌めて考へた場合は、容易ならん大事となるではないか。日本の國が古いといふことは漫然と古いのではない。一瓶の水を一瓶に移す如く、皇

統連綿として今日に至り、更に萬世に亘りて一系であるといふことが、當然または必然として豫斷せられる因緣と果報とを具へてゐるといふにあるのだ。——つまり、「萬世一系、皇統連綿」であればなぜに貴いのかといふ所まで變形することに氣づかねばならない。人間の意識、及びそれが更に明瞭せられて名辭とか名題とかいふものになつたそれの底に、意識の上に明化されない活躍、躍動が潛在してゐることが多分にあるものだ。

博士の說明は、日本の國は貴いといふ、その「貴い」に中心づけられてゐるが、兒童の問は、「古い」といふことに中心づけられてゐることを知らねばならない。從つて、博士の說明は、博士なるが故に肯いても、それは博士といふ偶像に參つたので、胸の琴線は更に振動はしない筈だ。少しも禍根が除かれてゐない。何時かは、日本國の價値を否定する因が、こゝに蒔かれたかも知れない。

この問題は、國體觀念が確立してさへゐれば、つまり信念さへあれば、さううたへたことではない。あまりに不論理的で、土方の惡口雜言の類である。何もさう屁引込する程のことでもなささうに思はれるが。先生なり、郡視學なり、殊には、博士が、「古い」といふ言葉をあてはめた物は、一方は(わらじ)、個體的存在稱呼であり、一方(日本)は、有機的、實在的、價値的、規範的、道義的存在稱呼であるといふことに氣づかぬであらう。これらが大體あわて過ぎてゐる。さもなければ呑氣過ぎてゐるやうに思はれる。兒童のいふ草鞋といふのは、一個の草鞋をさすのであるから、二日と持たないやうなものであるが、日本國といふものを、先づ便宜人に約していふと、(上といはず下といはず)一人の個體が滅んでも二人なり三人なりの新しい個體がかはる。物が古くなれば廢物になるといふは個體についてゞあるが、有機的に見た場合恒久性と擴大性とがいよ〳〵活潑になる譯である。而して人間の本性にしつくりしたもの、これを道義と名づける。日本の國家がこの道

義の大綱さへ失はなかつたならば、永遠の生命に棹さすもので、天祖撰國の昔より色もかはらぬ扶桑國である所以がうなづかれるであらう。人間の本性を阻害すればこそ、血でがなつて、新國家が出現するといふことになる。そこで、日本の國の「古い」といふことは、道義をとつてかはらなかつたといふ反證になる譯で、「古い」といふことから貴さがうかゞはれるのだ。博士は、おそらく、『貴い内容をもつてゐるといふことは永遠の性命に棹さすことであり、その果報として天壌無窮の詔勅に血が通ふて、そこで「古い」のだ。』といふことを補足するを忘れたことであらうと思ふ。

私は、この事實をば、單に一事實としてのみ見るべきでないと思ふ。これは、一事實として見るよりも、國民教育界の全般をおほた事實であるとするに少しの無理もないと思ふのである。憂ふべきに存在するのである。單に教育界の憂ではない、實に國家の重大なる病患でなければならない。これを局部的疾患と見ればとりかへしのつかぬことであ

る。

問題は、最初單に一教員のものであつたが、郡視學に持ち出されるまでは、相當の多數者に於て、相當攻究されたものに相違ない。それでも、疑惑が晴れないによりて、地方教育界に於ての一權威である郡視學に問題が移つたのだ。郡視學から博士に教を乞ふまでには、また相當攻究された上のことであらう。而して博士は、この道に於ける殆んど最高權威者の如くである。その説明は、かゆい所に、手が屆かないといふ所でおしまひになつた。博士は、「教育界の不徹底かくの如し、國民の國體觀念かくの如し」と、この例證をあげて諄々として國體の尊貴を説いた所が、聞いた學生は迷つた。迷ふものゝ罪か説くものゝ罪か、それとも罪は何處からか出張つたのであらうか。憂ふべきことである。なげくべきことである。國體は尊貴である。仰いて頂きを見難く、凝視めてその底が探りにくい。淺薄にならされた現代人にとつては、國體は難信難解の法でなければならないが、そ

れが故に、國民學つてこの逢妄より醒めねばならぬ。國民教育は、あらゆるもの、魁とし
て眞先に出直さねばならない。

前編　生命凝視の教育

一　國民教育の本質的内容

私は、前項に於て、國民教育の出直しを提唱した。よつて、この項に於ては、國民教育の本質的内容について考察を進めることにする。

私は、六敷しいことは知らない。また知る必要も認めない。よつて最も簡單に、明瞭に常識的に、

「國民教育（日本國の）とは、正眞正銘の日本人を仕立て上げることである。」

と申上げる。これには、一應はどなたでも異議は申されまい。而して、私には、この「正眞正銘」が大きい問題である。現代人には、或は、これはスフインクスの謎でゞもあらうか。あまり分り切つたことを言ふと、時に謎になるからである。私は臆面もなく次の斷案を申上げる。

「日本に生れ、日本に國籍を有し、日本天皇の臣民として忠節を忘れず、愛國の至情に充ち滿てる日本人！　これは、必ずしも正眞正銘の日本人とは限らない。」

謎とはこれである。問題とはこれである。「正眞正銘」の言葉は、普通出來合のものには冠らさない名である。底の底から、鍛へられよなげられて漸くにして出來上つたものこそ、初めてこの言葉があてはまるのだ。うつかり用ひると、算法に大分の手違を來すことを思はねばならぬ。

凡そ、物あれは則がある。則とは、それが必ず存在し、活動し、成立せる所以の法則である。天然法爾にその法則はあるに相違ないが、吾々凡夫は之を觀取し得ないから、佛の、如實知見を以て、その存在活動成立の所以を發見せられた證の法則を以て、法則とすればよい譯である。私は、こゝに腰を据えて日本國體を味識し、それに一分もはづれない日本人卽ち正眞正銘の日本人を斷定して、それを飽くまで日本の國民教育に要望してやまないのである。さて、

「實相は必ず諸法、諸法は必ず十如」

であることは、諸佛の深甚無量の智慧によりて究盡されたことである。十如とは十如是の略、十如是とは、法華經に曰く、

「如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本、未意究等」

と。

私は、今十如を釋するが本旨でない。たゞこの法則によりて、一切萬事が開顯せらるゝといふ佛の指南をば、日本國體闡明のためにあてはめやうとするその必要丈をちよい〳〵申上げることを許してもらひたい。

初の如是相とは、覺て別つべきその色形にあらはれた相、如是性とは、自分不改で、そのものゝ心性、如是體とは、主質に名くで、そのものゝ本體、この現象、不改の傾向、本體の三如是を本として、是より殘りの七如是が出でゝ十如是となるのである。つまり三如是はそのものゝ存在の法則で、その存在が活動を產む。それが如是力、如是作となる。如是力とは、能力功用のこと、如是作とは、能力功用を外に發して種々の所作構造をすること、已上の相性體力作をもてる事物が、如何なる習性的隋力または生活によつて作られたかといふ原因がら如是因、この習性的原因にからまつて影響し助長した助緣が如是緣、この因及緣によりて成就したその事物が如是果、而して、その出來上つた位置が如是報であ

る。この因緣果報の四ツが、そのものゝ成立の法則、これ等の如是の本から末まで、何れを擧げても十如是が宛然具つてゐるといふことが如是本末究竟である。これである。この法則である。この十如にくるひがあれば魔事である。魔民である。日本人として、日本人の色形相を具へても、心性これに伴はざれば魔民である。今、淺く例證をとつてあつかへば、忠君愛國の至情奔りて大津事件を仕出かした某、彼れは、「正眞正銘」の四字を奪はれて、遂に魔民に墮したものである。また、忠道を譏誹し、臣節を潛妄し、名分を紊り、秩序を破壞する等の學者思想家政治家等、及其の亞流ありとせば、これ日本民族としての心性を持たないばかりでなく、その色形相をさへも具へざれば、魔民も魔民、大魔民である。日本國に正眞正銘の日本人幾何あるであらう。日本國を護持するものは日本人でなければならない。その日本人のなかに、正眞正銘の日本人幾何もないといはねばならない現在の國狀は、正しく國の病患でなければならない。

畏くも、　至尊の詔りに、

今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ、或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル

といふ、この容易ならん御心配、何とおそれ多いことではないか。實によく〳〵のことである。何と偉大極つた御悲痛であらう。金甌無缺の皇國に於て、怪我にも言ふまじく聞くまじい大不祥のおことば、それをば、詔勅の明文におあらはしになつての御なげき、一度に國が振動するほどの大事件であらねばならぬ。然るにこのおことばをも、あまりの大事と思はぬ迷妄、こゝに至れば歎くにも言葉がない。この歎きが次第々々に高じて、居ても立つても居られないまでになつたらどうなるであらう。私は、それを七百年の昔に見るのである。

日蓮曰く

「日蓮によりて日本國の有無はあり」

何と偉大なる歎きであらう。何と偉大なる決意であらう。何と偉大なる抱負であらう。かくの如く、日蓮すでに魁したり、二陣三陣と續いて日本國體を護持し擁護し、天晴正眞正銘の日本人たらざるべからず、國の疾患は、正眞正銘の日本人によつてのみ救はれるのである。

さて、新知識者流笑ふべからず。日本國とは囚はれたる名でない。

日蓮曰く

「世界とに日本國なり」

何と物騒な、物に狂うての言草か、將たまたカイゼル流の非望か。何は兎もあれ、たゞで葬るべき些事とは覺えない。而して凡夫のあて推量最も危險である。日蓮のことは日蓮にはいはしむるが捷徑だ。その宣言をきけ。

選時鈔に曰く。

「日本國と申すは天照大神の日天にてましますが故なり。」

高橋入道御返事に曰く。

「日本國の王となる人は、天照大神の御魂の入りかはらせ給ふ王なり。」

日眼女釋迦佛供養事に曰く。

「日本國と申すは、天照大神と申せし女神のつき出し給へる島なり。」

今これを手取り早く言へば、

「天照大神によりて肇められたるその國、その名は、祖神の御德體によりて日本と稱し、それに君臨ましますは、天照大神の御魂の入りかはらせ給ふ天皇である。」

となるのである。日本天皇を現人神と稱し奉る所以が、これで明かであらう。かくも深く見ると、天照大神の御魂の御相續なくば＝つまり思想の相續なくば、日本國も同時にないことになるのである。剋して言へば、日本國とは、天照大神の御精神に外ならない。神武

天皇、「日の神の裔」と宣らせられ、我等の祖先は、彦(日子)といひ、姫(日女)と名乘つたことは奥床しいことでないか。

そも天照大神の御精神とは何であらう。こゝである。桁を間違つては一大事、思をひそめて、天祖の神勅に見よ。

「我が子孫の王たるべき地なり」

この「王たるべき」が問題だ。ウッカリすれば目にもとまらぬことながら、世界の運命の要がこゝだ。我々どもの目は、六十度の視野をもつてゐるのみだ。それに道入らないものは見得ない如くに、我等の知識にもそれがある。はづせば見えない。かくれてゐるものは尚更分らない。我等は、知識を過信してはならない。靈を以て靈にふれるのだ。

「王たるべき」

「佳い國が見當つたからお前にやる、サツさと行つて領有しろ、」と見たら普通だが、それ

では天祖も我等も同樣だ。偉大さはどこにもない。何とか別の義がありさうなものだ。分らない。指南がありさうなものだ。

國體學の創唱者、田中智學居士、「天壤無窮」(國體篇)に曰く、

「去歲に呼んで義理が少し違う。卽ち『王道を行つて仁政を施く』の義で……「我が道を行ふに便利の土地を見出した、あれへ往つて、かねての敎訓の通り『王道を行ひ布いて宇內の人類を救正せよ』といふ神意である」

王たるべき！　それは、政治の標準規範たるべき王道であつて、更に要約すれば、日蓮のいはゆる、「世を安んじ、國を安んずる」ことである。神武天皇は、これを、東征の詔に於て、

「天業」

と仰せられた。

「天業を恢弘し、天下に光宅す」

天業とは神の御事業といふこと、神とは天照大神、天照大神の御事業とは、神勅に「王たる」(王道)と宣せられたるによつて明かである。

又、御卽位の詔に宣はく、

「上は乾靈、國を授け給ふの德に答へ、下は則、皇孫正を養ふの心を弘む、而して後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ふて宇と爲さん、またよからずや」

これ卽ち天業の內容でなくて何であらう。「德に答へる」に「養正」を以てするは、德の內容、正を養ふにあるを以てゞある。この養正の德こそは建國で大綱であらねばならぬ。

東征の詔に宣く

「故に蒙らして以て正を養ひ、此の西偏を治む。皇祖皇考乃ち神、乃ち聖にして、慶を積み、暉を重ね、多く年所を歷たり。」

養正の德は、かくて慶を積まれ、暉を重ねられたる御德で、一時出來合のものではない。天祖が、神器を以て御象徵あそばされたる御魂をば、世草昧の故を以て、多年消極的に、血と淚を以て、行ひかためられつゝあつたものをば、神武天皇に至り、いよ〳〵時を得て、建國の洪謨を施かれたものである。

積慶
重暉
養正

これは建國の三綱にして、上下等しくよらねばならない天照大神の御魂の御表現である。

この神德　天業を宇內に遍滿せしむる大宣言を、日本の邊土に埋むることを敢てする日本民族の朦昧を歎かずに居られようか。「八紘を掩ふて宇となさん」と。大なる哉！　日本國の使命！！　世界を掩ふてあます所ないではないか。さればこそ、

世界とは日本國なり

政治でも教育でも、藝術でも經濟でも、ありとあらゆる施設經營が、悉くこの日本國體の表現となるにあらねば埒が明かないと。日蓮は、法華經をかくは讀まれたのである。

尙ほ分りよく言へば世界の全人類は、天照大神の御精神を以て心とするでなければ落居が得られない。故に日本國萬民は、天照大神の御精神に歸向せしめて、人類のすべてをして天照大神の御精神を全世界に宣傳弘布せしめて、人類ゆく、奮ひ起つべき時を待つべく、國民教育の本質的內容を提唱することかくの如くであるが、更に十如是の法則を以て日本國を觀察したものを擧げると、

田中智學居士著

「天壤無窮」（國體篇）（國體原理抜粋）

如是相……君民一致萬姓一家
（國の體例制度風俗等すべて國家の組織）
如是性……忠孝一源道統護持
（億兆一心克忠克孝の國民性）
如是體……神器表彰眞理體現
（神德道法の實質たる國の本體內容）
如是力……積慶重暉恢弘養正
（天業光宅古今を貫て唯だ正義に集中す）
如是作……道義建國世界統一
（道義を以て世界の區々存立を同化せんとす）
如是因……乾靈授國輪王乘統
（天祖先づ世界人類のために國を擇ぶ）
如是緣……國聖世賢正義光揚
（國聖世賢の開導直接間接に能く國體を宣明す）
如是果……萬世一系天統寶祚
（神の德と道の心とを位の中心正體とす）
如是報……風土秀麗最勝靈國
（寒暖中和風土優秀の美は自然に人心を悅可す）
如是本末究竟等……天下一王四海一家
（四海同胞八紘一宇の神謨儼として常に存す）

五百箇御統の國
その名は日本！
大御祖の名は天照神

神の心は……
萬有森羅のこりなく
溫め、照し、育む
偉なる哉！　天照神の名

神の體は……
德の源

天の下ことごとく
天照神にあつまれ

神の名に……
不思議あならば
手にとりて見るべし
天照神の國！

不思議國、日本！
凡夫の眼にあまるらん……
さらば……一寸拜借……

佛の眼鏡を……

佛の眼鏡！
よくもうつつたものなり
不思議國！　日本の相！
不思議なる哉、十如の眼鏡！

不思議國の日本と、不思議の法則十如是と、一分のすきもなく、しつくりとはまつた相、それはまた不思議以上の不思議としか思はれない。妙とでもいはうか。妙國日本、人類同善四海一家の寂光相も、日本國ありてこそ幻とならずに濟むであらう。

二　不思議をたゞる

私は、ごくあつさりではあるが、日本國體を味へて見て不思議といふことを感じた。この不思議は讃歎の不思議である。この汚物をながしたやうな人間世界に、このやうに光り輝いた希望に生れる文化の鑄型ともいふべき國家が儼存してゐるといふことは、大なる不思議でなければならない。而して日本國體を以て、かくの如き存在であることを、日本人さへも、あまり深く考へないといふこともまた不思議であらねばならぬ。この不思議は、慨歎の不思議である。さて、この不思議の存在を呪ふものゝあることは更に不思議である。この不思議は、慨歎も忿怒も通り起した叱咤の不思議である。

私は、前項までに、この不思議の存在！　日本國體が、とりもなほさず、國民教育の本

質的内容であらねばならぬ所以を述べた。この難解難入、難信難解の不思議の存在、ありとあらゆる人類の生命を融かして、自もなく、他もなく、彼もなく、此もなく、自を失はず他を失はず、彼も失はず、此も失はざる不思議の殿堂、法界一體圓融事の一念三千の相そのまゝの日本國體そのものを、兒童の頭に植えつけんとすることが教育の生命であらねばならぬ提唱に至りては、最早や、不思議ともされないほどの不思議でゞもあらうか。世相は、最早や、不思議を辿らねば辿る所がない。

日蓮、聖愚問答鈔に曰く、

「夫れ妙法蓮華經＝一應、生命の本然に名く＝とは一切衆生の佛性なり。佛性とは法性＝一應、眞理の感受性＝なり、法性とは菩提なり＝一應道義心に名く＝所謂多寶（如來）十方（世界の）諸佛乃至龍神八部、人天乃至那落の炎の底にてあらゆる一切衆生の備ふる所の佛性を妙法蓮華經とは名づくるなり。されば一體首題（南無妙法蓮華經＝一應、生命

の凝視、眞理隨順に名く＝を唱へ奉れば、佛性は皆呼ばれて、爰に集る時、我身の法性は法報應の三身＝爰には一應、無住無覺の眞理が、一旦は知慧の香と薫じ、それがあらゆる生活にまで應現することに名く＝共に引かれて顯れ出づる、これを成佛とは申すなり。例せば、籠の鳥鳴く時空飛ぶ鳥の同時に集る。是を以て籠の鳥も出でんとするが如し。」

聖も羨むべからず、愚も嘆くべからず、共に輝く光明體であり、同じく感孚すべき本地性ではないか。聖愚、猶差別を認めない。何で年の長幼を以て的を異にすべきことのあらうぞ。

長といひ、幼といふ。たゞ知識の分量の多寡、經驗の差等、それに伴ふ分別の單純複雜、功利的打算の粗密、感情及意志の錬不錬等にとゞまるのみである。さて、大人の知識感情は、次第々々に硬化して、自我をば、繰繰の如く武裝し、さなくば奥深く自我を祭り

込んでは其美を弄んで法悦を稱し、安住をほこり、天業的佛事佛事的天業をば、自己欺瞞となし、迎合的虚僞、瞞着的行爲として輕侮する傾向は、しみつたれな增上慢の分際に入るべきでなからうか。私は、現在の教化者を以て任ずる人々に、更に謙怯なる思想感情の一面を所育することを要求してやまない。我々どものいはゆる自己なるものは、何してもちっぽけなものだ。何物に齷齪してゐるかをふりかへつた場合、自分に對する輕侮は、更に苦笑を禁じ得ないことがある。私は、私をさう思ふと同時に、一般人をもさう思ふのである。アヽ、世人は何に齷齪してゐるであらう。名か、利か、地位か、力か。而して、その名、その利、その地位、その力。悠久なる天の下に、廣博なる地の上に、幾億人と共なる世界に住んでこれを思ふ時、我は、昏倒しさうになる。なぜに、こんな小ほけなものが人間だらうか。名をあさつて何を得てゐる、利をあさつていくらを得た、アヽ考へるさへシャ〳〵して壽命にも及びさうだ。天壤と共に窮りなく、八紘を掩ふてあますなき大宣言

を、敢て自分なりに小さい領解の中に封じ込むことをあやしむものなく、小さいやくざな自己を、大理想、大願業の懐に沒入することをば、狂者の如く危險視するその智見は、これ正しく魔の入智慧ではなからうか。

幼者を輕侮する大人、殊には兒童を蔑視する教育者は深く自己の顚倒の見を恥ずることを知らねばならぬ。

兒童は、實に、生命の泉を掬まねばやまぬ詩人である。兒童は、自在に飛翔する自由思想家である。兒童は實に謙怯なる求道者である。兒童は、實に眞摯なる藝術家である。總じて、彼等は自他に亘りて生命を凝視する人間の天分の澁渕さを未だ失つて居ないのである。彼等は、知識感情言語を超越して、靈の波動に感應し得る素質を最も多量に、最も活潑に所有して居るのである。

佛教では、五感を通してまとめた知識を第六識といふて、更に其上に第七識、第八識、

第九識までをたてゝゐるのである。今、

日蓮の總在一念鈔をかりていへば、

「我等が最初の一念は無設無記といひて、善にも不定、惡にも不定、闇々湛々たる念なり。是を第八識といふ此第八識は、萬法の總體にして、諸法總在して備ふるが故に、是を總在一念といふ。……此一念動搖して一切の境界に向ふとも所緣の境界を未だ分別せず、是を第七識といふ。此の第七識動搖し出して善惡の境に對して悦ぶべきは悦び、愁ふべきは愁へて善惡の業を結ぶ。是を第六識といふ。此の六識の業感じて來生の色報を獲得する也」

第六識は、六道輪廻の本にして、個體我の積極的作用である。それは、いはゆる煩惱にして、その煩惱は、處置しても處置しても處置し切れない。克己とか修德とか、いろ〳〵と聖人賢人が總がゝりで、工夫に工夫を重ねても、所詮は煩惱の洪水には加何なる堤も保

てない。わづかの隙も、その煩惱の水の滲透性にかゝつては堪うべくもない。而して煩惱は業を起し、業因によりて苦の果を得、苦果によりて煩惱を生じ、また苦果を招ぐといふやうに、轉々輪廻して苦縛を脫し得ない。所で人間といふものは、案外に譯なく麻痺してしまうものだ。それで苦を苦と思はず、または、苦を人生のきまつた道と觀念してか、うめきながらわめきながら名を追ひ、利を追ひ、享樂を追ひ、權力を追ひて流れ流れる。これを厭ふて、第六識の高等の煩惱を亡ぼして、涅槃の偏空に入るのが、いはゆる小乘の聲聞、緣覺である。この等二乘が、善惡の業を作らず、灰身滅智の涅槃に入るのは、第七識の無記性に入るのである。而もこれ等二乘が、自己だけが涅槃に入つてしまはうとするのは、精神そのものを個體的に見てゐるからで、この個體我を滅して涅槃の無漏空に入れると思ふは、消極的ではあるが、個體我に執着があるからだ。いはゞ法界は平等一體であつて、決して自己だけが脫れることは出來ないといふことを悟つてゐないからだ。それが無

明だ。又、早く自己だけ空に入らうと思ふ所から、世の善惡等について、中庸を得た處理をする心が乏しい。これが塵沙の惑である。いはゞ自己完成を唯一のモットウとする聲がこの第七識無明塵沙の識を免れない。第八識こそは、譬へば、自ら一切萬法を藏りなく、明かに浮べる鏡自體の如きものであるが、これに向上、向下の兩面を持して、一は元品の法性、一は元品の無明である。名はちがつても一物兩面の同共、この元品の無明をおさへて、元品の法性が、一佛乘種に接すれば、こゝに第九識の本清淨識を得るのである。卽ち八識は因分、九識になると、乘種を得ての果分であるから、權迹の佛敎ではあり得ないことがらである。故に、最初の一念とは、第八識因分に名づくるのである。

總在一念鈔に又曰く、

「最初の一念展轉して色報をなす。是を以て外に全く別にあるにあらず心の全體が身體と成るなり。相構へて各別には得意すべからず。譬へば是水の全體寒じて大小の氷となるが如し。仍て地獄の身といひて洞然猛火の中の盛なる焰となるも、乃至佛界の體といふ色相莊嚴の身となるも、是一心の所作也、依之、惡を起せば三惡の身を感じ、菩提心を起せば佛菩薩の身を感ずるなり。是を以て一心の業感の氷にとぢられて十界とは別れたるなり。」

今、「最初の一念展轉して色報をなす」ことを悟らざれば、心は心、體は體、佛菩薩は佛菩薩、地獄餓鬼は地獄餓鬼として、飽くまで動きのとれぬもの、運命づけられたるものとして、隔手たる我見我執を築き、第六識の曠野に彷徨するが故に、狐狼野干と化しては咀嚼踐踏し、骨肉狼藉晝夜に行はれ、魑魅魍魎たなびき、惡鬼夜叉橫行することを不思議ともしないのだ。かしこらやかなものが、平等だの博愛だのと立てゝも、それは機械的なボソボソした平等觀か、メソ〳〵した人情的博愛に過ぎない。故に結局は、火が出るか、涙で曇るかゞオチである。唯物世界の悲劇の、止め度なく發展するのが必然である。六道を

輪廻して浮ぶ瀬のない世界は、第六識の世界であることを我々どもは深く考へねばならぬと同時に、これを厭ふて、無漏空の涅槃の世界即靈の世界に急ぐ自己完成屋のしみつたれも排さねばならぬ。第七識の世界は、過ぎたる暦とさして差はない。よつて、現在の世界の要望する文化は、個體我を超越しながら個體我の澄澈さを失はざる、諸法實相の哲理一念三千、法界一體圓融の總在一念の第八識因分に血の通うて、靈と肉と融け合つた第九識の果分、事の一念三千、第三の文化であらねばならぬ。如何な政策が生れても、如何な制度が布かれても、ボソ〳〵した味氣ないものでは、なか〳〵承知しないのが人間である。奪つていへば、今の世界の人間には、獸格があつても人格は認めがたい。安定のないのに聊かの無理もないことだ。さて、これが現代の相である。現代とは成人の世界である。我等の世界は擧げて六識の世界である。七識の世界があつても、それは、地平線上のものでない。然るに兒童の世界は、未だ、六識とも七識とも固定してゐない。第八識因分を代表するものは、先づ兒童の世界であるといはねばなるまい。一佛乘の種子、摩訶不思議の日本國體が、花と開くは、兒童の世界に期待することが、最も自然であり、最も適切であらねばならない。不思議を辿り辿れば遂に不思議がない。

三　教育の要諦

近年、一としきり人格教育が叫ばれ、教育界一齋に色めき渡つたことを記憶する。教育は、人格と人格との接觸に待つ以外にないとして叫ばれたものだ。よつて教育者の人格の向上が教育の向上の最必要々件として、種々の論篇著述が、隨分教育界を賑はした。よろ

こぶべきことではあつた。然るに、その効果は幾許あつたであらう。私の見る所では、この叫びは遂に曙光を呼ぶ鶏鳴ではなかつた。遺憾なことである。叫ぶもの力が足りなかつたのか。それとも深い根底がなかつたのか、それとも時代との距離があまりに大きかつたのか。

私は思ふ。人間の人格など、甚だたよりないものである。たよりになる人格者といふものは、多くありさうも見えぬ。いはゆる人格者にどれ程の力があるか考へて見るがよい。概して、人格者などいふ名は、力がないといふ代名詞かの如くさへ思はれてゐる。第六識の世界には人格が期待されない。第七識の世界に出入するものに期待して見ても、結局はといふものゝ己を清うすることを以て、生活の標準としておはりだ。人格者は強い所があるにきまつてゐる。従つて、感化力もそりやあるにはある。然るに時代の趨勢といふものの力と、いはゆるあるかないか程の少數の人格者の力といふものとの比較がとれない。餘

りに大きい差であることを思はねばならぬ。

紙片が飛ぶ、こつちをおさへた。あつちのつちが飛ぶ。それを押へた。そのうちにこつちが飛んでない。紙片は二枚三枚でない。茫然として手を拱いて傍觀するといふ筋途は、時代の趨勢と、人格者との關係だ。人格教育を提唱した人々の、いはゆる人格の內容は、あまり明でなかつたやうであるが、畢竟ずるに、第七識の二乘根性を脫して居なかつたことは確だ。榮えた効果を見なかつたのが寧ろ當然であつたであらう。

近年に至りて、思ひがけない方面から、自由教育とか、藝術教育とかゞ盛んに唱へ出されて、可成強い反響を與へたやうである。暫く教育圈外に立てる私は、面白い現象だとも見、皮肉なものだとも考へ、かくあらねばならぬものだとも思つてゐる。

一體に教育界に生へ育つた者は、年の功に比例して、凍みた天神型である。硬ばつて、內容は空虛で、藝術を口にするもの、自由を口にするものをば、一把ひとからげに、人間

のち外に押し出しかね間敷血相を以てきらつたものであつた。＝藝術家を氣取つたり、自由にあこがれたものゝ多くの生活は、また擯斥に價するものであつたから、よい取組でもあつたが。然るに、文藝家、藝術家によりて唱へ出された、自由教育とか、藝術教育とかいふ教育主義が、可なりの勢力を以て、教育界に浸入したことは爭はれない。萎靡沈滯した教育は、漸く生氣をとり戻した氣はいがないでもない。これは、硬化した人格教育の重苦を負はしめやうとして得た缺陷を埋め合せる自然の要求からでもあらうか。これも畢竟は、道學者型を打ち破つて、眞に自由なる綜合的人格育成法を呼び出す前提にてもあらうか。私は、これからの教育界にのぞむことは、勇猛そのものゝ如き態度を持して、小ほけな個憶我のきづなを斷ち、總在一念の生命の中樞、法界一體圓融の遠觀に突き進み、その上に九識心王の都（事の一念三千、日本國體）を築き、本清淨識（自我の光明）の體驗を得しむべきである。要するに生命の凝視を徹底し、綜合生活を活きしめ、生命の胸毛を振はせる

ほどの明るい人生を展開せしめ、佛陀神明の內證に如同することであり、せしむべきことである。眞の自由はこゝまで突き進まねばならない。自由とは勝手の義でない。放縱の意でない。我儘放逸は不自由の極を將來する。眞の自由は、一切萬法を理解するところの自由であり、それから味はれる自由である。進退の自由である。自由は外面的のものでない。內面的自由の發展からの自由自在であらねばならぬ。

總在一念鈔に又曰く

「十界——人間の業報を、善惡判によりて、十界に分ち、最下級を地獄とし、漸次餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛と名づく。——は、源其體一にして、只これ心なり。」物にてありける間地獄界に餘の九界を具し、乃至佛界に又餘の九界を具す。如是十界互に具して、十界卽百界と成るなり。此百界の一界に、各々十如是あるが故に、百界は千如是となる。則ち此の千如是を、衆生世間——その者の當體——にも具

し、國土世間――そのもの、環境――にも具し、五陰世間――當體成立の要素的資質に名く。――にも具するが故に、千如是は卽ち三千となれり。この三千世間の法門は、我等が最初の一念に具足して、全く闕減無く、此一念卽色身となる。故に此身は全く三千具足の體なり。是を一念三千の法門と云なり。依之、地獄界とて恐るべきにあらず、佛界とて外に尊むべきにあらず、此一身に具して事理圓融せり。全く餘念無く不動寂靜の一念に住せよ。上にいふ所の法門、是を觀ずるを實相觀といふなり。」

若し、善惡三千の色報、一念に通ぜざれば善惡水と油との如く、互に、相隔歷して、敎化は全く地を拂ふに至るであらう。善も力である。惡も力である。力は生命の相である。一念の末梢である。一念動搖して所緣の境に波動を起せばこそ、善ともなり、惡ともなるのであらう。波の反射する如く、所緣の境より更に突きかへされて一念に還元すれば善惡を沒して、新生命の威力たることに於て差別がない筈である。「地獄とても恐るべきにあらず、佛界とても外に尊ぶべきにあらず。」とは、この邊の消息を仰せられたものであらうか。然らざれば煩惱は菩提とならず、生死は涅槃となり得ない。而して敎化といふ仕事も、角をためて牛を殺すの愚を學ぶに異ならないであらう。邪見いよ〳〵頼みあり。」の斷案は動かぬ所である。これでこそ、敎化といふ仕事にも生命があるでなからうか。故に、敎化は、環境も嫌ふべからず、素質も厭ふべからず、さなくば

八紘一宇

六合一都

の御宣言は、遂に妄見に墮せざるを得ないのである。然らば、日本國體の無上尊貴は、うぬぼれ者の囈語ともなるべく、天壤無窮の大宣言は、大虛妄となり終せねばならない。「蛇は蛇を知る」で、我々どもの分際で、祖神の御內證にあやかることは先づ難中の難であるも、宇內救濟の使命をになつた聖者は、聖國の祖神の宇內救濟の大宣言に、ふれるが早い

か、肯くが早いかといふ所であらねばならぬ。我等は、謙怯に、自由に、大膽に、大望の教化により、飽くまで生命を凝視して、自我の本體を究めなば、蒼蠅も驥尾に附して千里を走るが如く、碧巒松顚にかゝりて千尋に叙ぶるが如く、凡身卽佛身となりて、日本國體の廣大無邊、宏遠悠久なる所以が會得されることであらう。

生命の凝視こそは、眞に教育の要諦であらねばならぬ。

生命の凝視！　これ兒童の世界に最も活潑である。

生命の凝視！　これあらゆる生活を生命づけることである。

生命の凝視！　これあらゆる生活を綜合し、あらゆる生活を導くものである。

四、貧しい教育經驗

私は、文豪漱石氏の坊ちやんを氣取つて、美事坊ちやんらしく教育界に乘り出したのは、米國のラッド教授が、我が國に來られて、人格教育を提唱して間もない時であつたやうだ。田舍にも、この人格教育の波が、漸くに漂うてゐたことを記憶する。今まで、ひからびて、ボソ〳〵した師範教育に大なる反感を殘して來たばかりの私には、ラッド氏の教育學は、本當に、ありがたい惠みの雨であつた。私は、探し求めて歩いて、漸くに、探し當てた心持で、心ひそかに笑をもらしたことがしば〳〵であつた。

而して、教育者の人格向上により、教育の生命がつながれ、兒童との人格の接觸を以て教育の要諦として、何等おそるゝことなく、大膽に、威勢よく、兒童と親んだ。然るに、私は、間もなく一つの暗礁に乘り上がつたやうな心持がしたのである。それは、私の所有してゐる大きい人格的缺陷が、靄のかけから浮ぶ島影よりももつと淡くではあるが、兒童の生活の上に讀まれ出した。私は、或る恐怖におそはれた。だが強いて打ち消しがら、警

戒を怠らず、益々勇猛に精進した。その影が、次第々々に濃厚さが増して行く。他人からも明かに讃れるまでになつた。私は、人知れず惱み出した。私は、私の缺陷をば、悉く、明らさまに告白した。而して、教壇の上からつてゐる、氣がついてゐる缺陷をば、悉く、明らさまに告白した。十數年後の昨年、在京者數名、予彼等に嘆願したが黒い影が遂にぬぐはれなかつたのだ。彼等は、當時を談り、往時を追り、追憶を語つて、予を中心に、同級會を開いてくれた。私はたゞ淋しかつた。私の與へた人格的黒點が殘つてゐる。に感謝の意を表して呉れた。私はたゞ淋しかつた。私の與へた人格的黒點が殘つてゐる。私の生命にかけて育み育てようとしたことは跟跡をだに存してゐない。私は淋しかつた。

さて、私は、前九年間の教育生活に於て、暑々五組の學級を担任してゐる。第一回の失敗にかんがみて、それからは、兒童と接觸の一番初めに於て、私の人格的缺陷について、綿密に告白することを以て例とした。それ程おぢおそれ、警戒を嚴にしても、長く受持てば受持つほど、私をかなしませる影が兒童の生活の上に漂ふことを知つた。

人間、感孚し易きは、缺陷短所である。あらゆる、宗教學派の末葉の濁るのも、社會風教の次第々々に、悪流氾濫を來すのも、或は此間の消息をかたるものでもあらうか。

私は、それでも、尚、人格的接觸こそ、教育の要諦であるといふ信念を取り消すことはしなかつた。そして、たゞ、勇猛に精進し得ない自分を悲んだ。私は、私の弱さをもて餘した。かうなつては、人格などいふものゝ手よりなさを思はずに居られない。私は、遂に人格的接觸の罪悪を感じた。しかしながら、接觸なき教育は、猶更罪悪だ。私は、もう、既に動きのとれない暗礁の上に乘りかゝつたのである。悶へに悶へて乘りきつても、破壊した自分は、將に航海に堪えないまでになつてしまつた。進退を失つた。その時に、私の學校に、教育會が開かれて、多勢の同僚が集つた。親しい一人の友人が、どの教室にも君の氣分が漂うてゐると話された。この言葉は、私の魂にヒイヤリと觸つた。私は、現在の自分は、オメ〳〵教壇に立ち得る自分でない、進路が新たに開かれるまでは、斷然、教育

界から身をひかねばならぬと、此時ひそかに覺悟をきめた。そしてひそかに斷行したのであつた。九年間の教育生活は流石に名殘惜まれた。私の慘めな形骸は、周圍の有象無象によりて、色々と取沙汰されたことであらう。

私は、其後、現代に於ける、日蓮主義者として、また國體學創唱者としての權威である田中智學先生のもとに走つた。而して、「日本國體の眞意義」なる大轉法輪に接した。その中に成佛義あり、私は、其の一節に、すべてを忘れて、歡喜湧躍を覺えた。破壊した私の魂は繕はれた。

其後、一ヶ年間の田園の生活は、私の蘇生の生活の第一歩であつた。

一日、人を雇うて、共々に、春の雪野の雜木原に薪切りをした。樹といふ樹、すべてが春の陽を浴びて、一樣の光澤々々しさ、滴たらんばかりの精氣を示してゐる。私はそれを凝視めた。心が躍る。身はゆたけさにつゝまれる。若山牧水の歌が思ひ浮ぶ。

春の陽に、
小斧ふることのかなしさよ。
前後不覺に
切りくづしけり。

中に一本、すぐれて大きい樹の木がある。近寄りて仰いで見る。遠のいて仰いで見る。また、なでて見る。抱いて見る。幹は、一本で太い。梢は、幾萬か幾十萬か。根は大地に、枝は大空に、根の根毛から、枝は梢の尖端の薄い皮下まで、一樣に萬遍なく、早い所なく遲い所なく、靜かにめぐる樹の精は、外面に溢れて大空に散らばる。我は、この精のなかに呼吸をしてゐる。手には小斧がある。腰には鋸がある。而して今予は樹と語つてゐる。樹は我をうらまない。我れも樹をうらまない。樹は我を愛する。我れも樹を愛する。樹は我れに訓ゆ。我れは樹に感謝す。樹は寂然としてゐる。我が心は千々にくだけて胸に波立

つ。小斧は靜かにあてられた。樹の精は、樹皮を透して、鋭利なる小斧の齒をば傳うて、柄から手に、手から心臟に、腦天に。我が身はしびれる。胸は痲く。一振り振つた。二振り振つた。三振四振……、無我夢中に切崩した。一ト息入れてホッとした。樹はたゞ寂然としてゐる。生々しい傷口が、大きく開かれたまゝ寂然としてゐる。大空も寂然としてゐる。我が心のみはくだける。大地も寂然としてゐる。我が心も。次第々々に、つくろはれた。鋸をあてた。ひいた。一つ、二つ、三つとゆつくり、而して、無念に數十百遍、息を入れては數十百遍、かくしてやがて最早やに迫つた。

「バチーン」「バチーン」

これは、大樹の、目に見えない傾斜に、目で見えない纖維がはぢけたのだ。腕がしびれて、腦天の神經の尖端までそれが傳はつて消える。激しい緊張を覺えた。鋸は次第々々に深く這入る。「バチーン」とまた響く。梢が微かにゆれる。次第々々にゆらぐ。ゆら〳〵と傾い

たと思ふと、風を趨して、

「シュ——……ドシ——ン……」

あとは靜寂に歸つた。私は大地に横つた大樹に涙を注いだ。

陽はいよ〳〵明るい、空は廣い、樹々は寂だ、大地は嚴としてゐる。而して私も、明るい、廣い、寂だ。而して嚴肅を感じた。

この快明！

この雄大！

この靜寂！

この嚴肅！

生命の凝視は利いた

わが魂はおどる、

光りは我をつゝむ。

凝視るに限る。凝視めさへすれば、如何なるものともつながりが結ばれる。そこに圓融の香がある。圓融の味がある。圓融は自由の體である。自由は圓融の動きである。故に圓融なき所に自由がない。人格の完成とはこの眞の自由を得るにある。生命を凝視める時にのみ自由が產れる。生命を凝視める時にのみ人格の完成への道が展ける。

私が、生命凝視の教育を建設しやうとしたのは此時である。私の二度目の教育生活は、かくの如くかゞやいた生活ではあつたが、これが硬化した教育界の逆鱗にふれて、遂に、教育圏外に放り出された。私は、それには素直であつた。

我は、
衆と共に、」

我が行手に、
我が欲するものを築く。
我は、
衆と共に祝福す。

我が船は、
勇ましく辷る。
空は晴れ、
波靜かなり。
我は、
衆と共に祝福す。

果然！
船は進行をとゞむ。
我は叫ぶ、
暗礁に乗り上げたりと。
我は、
衆の前に陳謝す。

暗礁—それは、
衆と共に築きたるものなり。
我は、
衆と共に努力す。

我等の船は、
漸くにして進めども……。

暗礁は、
我等の築いたもの！
それは長かりき、
次第に高かりき、
衆は救ひの舟に、
我は大海に浮ぶ。

海洋に漂ふ我は、

たゞ天日とともなり。
陽は明るし、
陽は偉なり。
陽はいがめし、
我はたゞ陽を凝視めし。

陽は！
我に力を與ふ。
我れは陽の力によりて活く。
我は小さかりし
我は弱かりし、

我は貧しかりし。

人々よ、
お互は小さし、
お互は弱し、
お互は貧し、
我等はたゞ陽をば凝視めん。
陽は我等の力なりし。

五、所謂人格教育批判

私は、學者でもなく、思想家でもないことを、くやみもせねば恥とも思はない。學者必ずしも己れを正確につかんでゐない。思想家必ずしも謙虚に慣する生活を続きてゐない。故に、如何にいがめしい言論も、空虚を感ずることが一般だ。私は學者でも思想家でもない。たゞ偽りなく、眞剣に活きて來たことが私のほこりである。私は、このほこりに勇氣づけられて、私の了解を告白するのみである。然り告白である。

私は、屢々人格といふことを云々した。而して、今、人格教育の陥り易く、否當然陥らねばならぬ缺陥についてのみ申上げるのである。ついては、人格といふことの、私の了解から出發する。

「人格とは、己が、力、作、因、緣、果、報等を究竟する主體（相性同共）卽ち自我の統一主體である。」

この斷定は、哲學的にも、倫理學的にも、宗教的にも、會通自在の內容を定言したものと信ずる。

而して、この統一の、圓滿究竟の極境地が人格の完成である。成佛といふもそれである。

さて、孔子は、「行ふ處矩を越えず」の境地を開いた。しかしそれは圓滿究竟の消極面でなからうか。未だ極境極地には距離がある。佛陀、神明に至りては、更に、その人格を、積極的に、宇內に光被すべく、一網打盡の組織を、護念の網にまかせて、精一杯、生命の限り、我々共の頭上に覆へかぶせた。

佛陀は、

「妙法蓮華　敎菩薩法　佛所護念」

と御宣示なされたれば、これは、敎化を衣として民衆の前に光臨し給へる覺道の聖者であるが、

天祖神明は、

「汝皇孫就て治すべし寶祚のさかへまさんこと天壤と窮りなかるべし」

との大猷あれば、政治を表として人類に君臨し給へる治道の聖者である。

基督に至りては、天才的色彩濃厚にして、情熱の奔放、飛瀑の如く、飛法天に沖し、餘沫民衆の激怒を買ひて十字架の厄に會ひ、遂に未完成、未究竟のまゝに教化の幕が下りてしまつた。トルストイが、山上の垂訓を以て、「基督の内證の最低限界を示したに過ぎないので、その上に、眞の文化が組織されたに相違なかりしを……」と、なけき、且つ未建設の文化、永遠に秘められた内證にあこがれたといふことは、眞に基督をして偉大ならしめたものでなからうか。基督教徒たるもの、素直に三省すべきである。大聖基督をして、更に、二十年三十年の人壽を保たしめたとして、あれ以上の文化の建設、つまりは、地ならしと、足場が出來て、本建築がないとすることが出來るであらうか。基督の内證には、必ず歸結があつたに相違ないが、基督教の文化には歸結がないではないか。トルストイは

これをなけかれたのであらう。

孔子の跡を追うても孔子になれない。よしんば、なれても消極の一面に止まらねばならぬ。基督教を追うても結論が示されてゐない。基督教の文化は、無限の曠野の刈り拂ひでおはつたといふべきである。而して設計は、基督の胸には描かれても、未だ、製圖されてゐなかつた。我等の分際には持てあまる。基督教徒は、よろしく外にこれを探らねばならぬ。探し當てねば纏掛りでそれをあみ出すべきであらう。それでこそ主に忠なる所以でなからうか。

人々よ。佛陀に集り、而して日本國體につけ！　佛陀が、一代の教説の綜合經典なりと宣示された法華經に於て、日本國體を指した。洋の東西を問はず、擧けて、佛陀の護念即天祖の大猷に集らねばならぬ當然の歸趨であるまいか。そこで、私は今、人格（自我）完成の意義を次の如く斷定する。

「佛陀の證念即天訶の大欸に、我等凡愚の一念を融歸せしむるこれ則ち人格の完成なり。」

日蓮曰く、「大覺世尊、日蓮の頭に宿る。」といふはこれである。「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず」といふこれである。

讀者は、次から次へと出て來る、突飛な論斷、突拍子に驚倒することであらう。しかしながら、現代は、徒らに迎合してゐられない。生命への一乘に乘らしめねばならない。突飛止むを得ない。私は更めて、所謂、人格教育に免れ得ない缺陷をば、私の體驗を主として述べて見たい。さて、あらゆるものの凡ては、そのもの獨自の境地を所有してゐることは爭ひがたいことである。而して、人間に至りて、それが、最も複雜で、最も鮮かである。これ卽ち個性である。個性は、瞬時も固定を許さない。この絕えざる進展を統一するものが人格であらねばならぬ。故に、個性は、人格の音波である。

人格はその音波の源であらねばならぬ。したがつて人々各々は、波長の相違、振幅の相違、幅振動の相違等、悉く違つた音波を送り出すのである。そこで法則に合つた樂音もあれば合はない噪音もある。所で、同じ人間でも、時に調子が狂ふ。狂うてゐるのが平常で、時に漸く調子に乘るものもある。人間の世界の騷々しいのも無理はない。所で、教育といふことは、教育者は完成者を氣どり、被教育者といふ未完成者に對して與ふる、有意的の影響であるといふ概念に封鎖されてゐるかのやうに思はれる。さて、人格教育のたてまへとする所は、被教育者に對する、教育者の人格的影響といふことに基調をおくからには、情ないことのみ多いに決つてゐる。教育者は必ずしも人間の調子に乘つたものではない。利のために、名のために、地位のため權力のために、亂調子にならされてゐることが寧ろ常態である。人格教育も、かう考へては桁がはづれる。望みを向上に囑する譯だが、それもあまり心強いことではない。各々の才覺につながる人格は心細い限りである。眞の人格教

育は、各々の人格の接觸によりて遂げらるべき筈がない。よりてた〻一乘だ。最大、至高、豐麗、悠遠なる唯一の人格の筒の中にはいり込んで共鳴し、其共鳴を深め、それで漸く人格の教育も遂げらるゝことでなからうか。いはゆる人格教育、卽ち教育者の人格を綱として何が引き寄せられやうぞ。如何なる反響もなかつたことは、當然の事であらう。

私は、一年、家鴨の子を飼育した。彼等の世界は、日を追うて廣められる。日一日と複雜で巧妙な動作が示される。私は、多數の中最も特殊な巧妙な動作のものを一羽選り出して、未だ餌をあさることも、身繕することも知らぬ幼稚な雛の群に入れた。然るに、幼稚な群は、間もなく可憐な動作を始めたのである。そしてそれが、その特殊の型を持つに至つた。私は悅んだ。而して、言ひ知れぬ恐怖におそはれた。これは、人格教育の悅ぶべき暗示でもあるが、それよりも、恐るべき暗示でなければならぬ。世は、人格が次第に低下すべき傾向にある。それは當然の歩みである。各々が、しみつたれな、ちつぽけな自我を振りま

はすからだ。佛陀は、遠く現代を指して鬪諍堅固、白法隱沒、法滅盡時、五濁濁漫、恐怖惡世、末法濁惡、等と口を極めて宣らせられた。さうなる進化の法則であらうか。

我等は、無限の曠野にも比すべき、自我の開拓を活きて居ても、それは、極く小部分に過ぎない。我等の人格はあぶなけなものならざるを得ない。然るに、我等の兒童と接觸する時に、これが唯一のたよりである。我等はよかれ惡しかれ、執こい個性を持つてゐる。されば、接觸が緊密になればなるほど、兒童の自由な天地を封鎖することを知らねばならぬ。徹しねばやまぬ芽が、兒童の世界に崩え出しても、教育者の、個性の嵐に萎縮する。兒童の凝視めつゝある眼は、教育者の橫暴なる個性によりて他に轉ぜねばならぬ。眞に活潑なる、兒童の創造の世界は、次第に狹められる。我等は、所謂人格教育を築き上けんとする時、如何に周到な注意を以てしても、この悲劇を免れることが出來ない。何故なれば注意は、意識の上のことである。人格は、開拓せられても、せられんでも、自我の全部で

ある。我々どもの個性は、思ふまゝになる素直なものでない。注意によりて閉塞するやうなものでない。孔子でさへ、五十にして漸く天の命を知つた。現代に於ても、あまり秀抜でない人間揃の教育者は、あぶなけなものにきまつてゐる。殊に恐るべきは、比較的長所とたのむ所は、兒童の世界に影響することと比較的に微弱である。所が、己が自由に處置し得ざる自我の發展、卽ち缺陷こそは、最も兒童の世界に影響することが大きいのである。我等の長所と頼む所は磐石でない。つとめて漸くにして退轉をふせいでゐる程度のものが多い。然るに、自我の缺陷は然らず、根底ある強さだ。己が缺陷の、移り易きは當然の理でなければならぬ。私は、切に思ひなされた。兒童は、教育者の人格、個性から解放せしめねばならぬ。さりながら徒らに放浪せしむるは更に罪惡である。而して共々に唯一の人格に融歸せねばならぬ。唯一の人格とは、我等の生命の當體である。我等の生命の當體I それは、佛陀及神明にその姿がうつされてゐるのでなからうか。

六 新潮流瞥見

私の教育生活は、中途半端にして、遂に、一つの暗礁に乗りあがつた。その暗礁は、よく凝視つめた所、それは自分の人格であつた。人格教育をおいて教育なしと、隨喜の涙の新たなりし時は、臆しもしなかつたが、さて長い航海のうちには、いろ〳〵の故障が湧いて來る。遂に暗礁にのりあげた。これは私のみでないと思ふ。私の人格のみがやくざなので、外の教育者の人格は、調子の狂はないと、立派な、そして圓滿で力強いものであるとは限らない。人格教育は、結局は御輿昇ぎのやうな騒ぎでをはつてしまつた。教育界は、社會は、これによりて滿たされない。この滿たされない心の底には、遂に趣きのかはつた萌芽がのびてゐた。それは、自由教育であつた。藝術教育であつた。

この自由教育とか藝術教育とかの叫びが、教育界にあげられたのを、私は、教育圏外にありて、垣間越しにしけ〳〵と眺めては、心ひそかに笑ひを浮べたものだ。

然しながら、自由教育にしろ、藝術教育にしろ、何れも、輪廓は可成朦朧たるもので、したがつて、その内容實質に至りては、一層朦朧性が濃厚であつたことは事實であつたやうに見られた。而し、その何であるにしろ、それ等の人々の志向は、事々に拘束され來つた從來の教育から脫却して、兒童の本性のまゝに勇敢なる創造の生活を活きしめやうとする生命の羽ばたきでなからうか。然り、それに相違ない。私は、垣間越しに、この傾向を人知れず喜んだ。人格教育の暗礁に乘り上げ、藻掻いて傷いた私の魂は、日蓮主義の信仰に蘇生して、生命の凝視の上に、綜合教育を建設しようとして、遑慮なく振舞つた二年半は、私をして、漸くにして教育の味を覺えしめ、眞實に教育經驗を得しめた二年半であつた。故に私はいふ。私に、前に九年半、後に二年半の教育生活があるが、九年半の教育生

活は、教育經驗でなかつた。私の教育經驗は後二年半のみだと。この二年半は、兒童をして、自由に、勇敢に、創造生活、綜合生活の體驗を活きしめた二年半であつた。而して、私は、前には教育界からおしまれ、後には、教育界から放逐せられた。私は、素直に、笑を殘して教育界に訣別を告げた。然るに、聞もなく、自由教育、藝術教育の叫びが、新しい潮流として、掻き消すことの出來ない力となつた。すべては、時の審判に待たねばならぬものであらうか。私は、今、皮肉の笑を快く笑つて教育圏外に立つてゐるのである。

さて、これ等の提唱は、現代の社會生活、人間生活が、アマリに表面的で、功利的で、そして分科的で、皮カラびて、ボソ〳〵した、眞も、善も、美も巢喰ふ所のない荒れ果てた、冬野のやうな、棲んで棲み心地せぬ、活きて活き心地せぬ心に緣せられて、生命の奔騰した聲でなからうか。さうだとすれば、これは現代人のすべての叫びでなければならない筈だ。多年、この生活になれて、彈力を失つた、硬化し切つたものは論外として、生命

を熱愛するものたる以上は、いやでも應でも吸ひつけられずに居られない聲である。然りと雖も、こゝに一つの危惧が伏在してゐることを思はねばならぬ。何故なれば、この聲は情熱の聲である。かくあらねばならぬといふ理智が働いても、それは情熱に煽られた理智である。情熱にからまつた理智である。私は、さきにも言つたが、こゝにもマルクスの例をとつて見れば、マルクスは、あの理智と、あの公正な性分との持主ではあつたが、資本家の壓迫より、勞働者を救ひ出さんとして、その情熱の奔る所、「世界の勞働者團結せよ」との烽火を擧げた。而して、彼れは、遂に、圓融の世界を失つてしまつた。「世界の勞働者團結せよ」！　それは、理智からではなかつた。情熱そのものであつた。彼の理智は、それに煽られた。唯物史觀は、その情熱のからまつたものだ。彼は生命の熱愛者であつた。彼の生命の凝視は、遂に、ある層にさまたげられた。それは唯物史觀であつた。それは情熱によりて、灼熱された理智であつたからだ。生命の奔騰！　そこには、かくの如き弱點

が潜伏してゐる。氣づかねばならぬといふはこの點である。

筆をもとにかへして、自由教育といふこと、それは教育法の一面、教育態度についての教育主義で、即ち、教育者が、被教育者に對する態度は、なるべく、自己の意志を加へず、被教育者の自律によりて、自由に活潑に、創造の生活を辿らしめ、それ〴〵の生命の開拓を遂げしめ、而して、人間生活に一新生面を期待することだ。最も、さうなければならぬことではあるが、人間の天分といふものは、左程に頼母しいものではない。もて囃さるゝマルクスも唯物史觀に躓いた。人間は、先づ躓くものと相場をきめねばならぬ。躓くもよい。けれども躓き通しでも困る。躓きのまゝ起き上ることを得ないでは猶更困る。自由教育の畑に、自由にかけ廻る者に、この杞憂を抱くは何故であらう。

垣間越に見る自由教育の園には、大體に於て、

學習及指導ありて……教授がない。

自由ありて……規律がない。
創造ありて……依憑がない。
氣分を重んじて……統制がない。

細い所迄探し立てると際限がないから、極く必要な點だけにとゞめて、さて、ものには陰陽がある。消極があれば積極がある。笑ふばかりが悦びでない。泣くばかりが悲しみでない。明あれば闇あり、剛あれば柔あり、進あれば退がある等、複雑なのが人生だ。凡そ物事は平かでなければならぬ。然るに平かでないのが娑婆の相だ。それは偏るからだ。ひがむからだ。排するからだ。爭ふからだ。學習よし、これ生命の躍動を産み、進展を開く。然れども、これに偏すれば、心を謙うし己を怯うして、人に對する德を失ふ。自分でいじくつて見ねば信じ得ない、信賴し得ない習癖を助長する。孤疑は、偏固なる學習癖の産むものたること、往々にして見られる、疑は大きくすべし、孤疑すべからず。人間の生活に

闇さを呼ぶものは孤疑である。教育者は自由に指導すべし、自由に教授すべし。學習によりて自己をにぎらしむべし、教授によりても自己を凝視めしむべし。物は窮屈に考へてはいけない。學習のみによらねばならぬと思ふも窮屈だ。教授を主とすべしと考へるも窮屈だ。自由を唱へて自由を捨てることをしてはならない。自由を外部に求めることを必ずしも悪いとはいはぬが、内部に求めることが、自由の本質が得られる所以であることを知らねばならぬ。私の垣間越に見る自由教育は、隨分窮屈であるやうに見受けられる。例へば教室には、教壇があつて、教育者が教壇の上から嚴しく被教育者に對向しては、兒童はのびる所ものびないとかで、教壇は、自由教育に禁物の如く扱つたり、席次を固定しては窮屈だからそれをさけねばならぬとか、教材等についても、一定のものがいらないとか、一定の物を同時にやる道理がないとかの主張、それは最もだが、それによりてあながちに、その道理のみが道理だやうに考へ込んでしまうのも窮屈だ。人間には、嚴めしい所もなけ

ればならない、優しい所もなければならない、柔い所も、剛い所も、時により機に應じ、あつて惡い筈がない。一本調子で、人間が處理されるものだとの早合點がいかぬ。難解のものも、凝視れば難解とも限らぬ。極く平易なものも、凝視れば、際限ない深さがあるものだ。人生行路は、自由教育場の如くに、環境が整理されたものでない。難易雜然、好くものがなかつたり、好かないものがあつたり、入用のものは殆んど稀で、入用でないものが豫想しないものがありあまつたり、自分に當つて來るものは、創造の生活に不向きで、依怙の生活そのものであつたり、氣分などは、全然蹂躙されて省みられないのだ。その人生を最もよく活き得る生活、そのやうな雜然混然たるなかに於て、最もよく、己が生命をば伸ばし、深め、剛くし、靭くし、溫かにし、柔かにし、なめらかにし、酸いも甘いも、苦いも辛いも、御座なれと、それ〴〵味ひ、役立てるやうな、餘裕ある態度をながめての教育ならでは、自由教育も累の種だ。自由教育大いによし、然れども、自由にとらはれて、

眞實相からはなれ、事毎に躓き、遂に、希望を失つて再び立ち得ない人間に傾向づけられては折角の叫びもはかないことだ。自由教育は斷じて窮屈な考方をしてはならぬ。創造の生活大いによし。然しながら創造の生活は、遂に依憑の生活にはいらねばならぬことを知らないでは、人類世界に、遂に落居がないといふ邪見に墮せねばならぬ。依憑の生活とは、人間生命の究極的表現者の、人類救濟の大慈願海に沒入する誓願の生活である。願業である。創造の生活は、遂には願業に昇る梯であることを知つて、それで自由教育にも生命が宿るでなからうか。

日本の自由教育者よ。私はいふ。私等の頭上には、人間生命の究極的表現！　依憑の的！　日本國體が輝いてゐる。それに氣づけば、自由教育は、生命の順風に帆を擧げたといふものだ。然れざれば、漫談醉歩、一里の道を十里に歩くやうなものではないか。惠まれたる日本の自由教育者よ。眞の自由教育は、日本に於て始めて建設され、遂に、全世界

に及ぼされねばならぬ任運の使命を負うてゐることを自覺せられたいといふことを申上げる。

次に、自由教育といひ、藝術教育といひ、とりたてゝ差別を云々する程でもなさそうだ。自由教育といふ名、それは教育態度に緣せられた名、藝術教育といふは、稍々内容に踏み込んでの名でなからうか。スタートが違つても結局は同じコースであらう。藝術教育の歴史はかなり古くともこゝにはその用がない。しかし、我々どもは、教育問題が教育家の專有といふことでなしに、外の人によりて論議される傾向を喜ぶ。文藝家の藝術教育論などは、今一層深刻に、今一層整然としたものをほしいものである。

私は、更に、最近、これ等の提唱によりて起つたと思はれる、教育界の反響として認むべきものを一瞥しよう。

童謠は、如何なる僻阪の兒童によつても聞かされる。兒童劇は見せられる。圖畫は、眞

に、個性の閃きが出て來た。唱歌も魂を躍らせる。作物には泣かされる。總じて兒童の生活が深まつて來たことは事實である。隨つて、德育教科でも、從來のやうな、戒律的で功利的な、空虛な境涯から、脫しつゝあることでもあらう。其の他の教科でも、形式偏重、官廳喜ばせの、兒童の生活とあまり交涉の少ないものは、次第々々に影が淡くなることでもあらう。さてこれから何が飛び出ることであらうか。駒であらうか、蛇であらうか。北歐の藝術は火をはいた。南歐の藝術から膿が出た。藝術のための藝術ならば、何が出ようと、一向に頓着もいらないが、それが人生の煩となるならば、さう呑氣にしても居られまい。

自由教育の提唱者よ、藝術教育の提唱者よ。自由よし、放縱放逸に流るゝ勿れ。創造よし、人生の煩を殘すなかれ。躍動よし、憍慢に墮する勿れ。深く戒愼を要することを、我は、教育圈外に立つて深き憂へとしたのである。

然るに、更に最近に至りて、健實なる教育主義が、次第々々に、教育界に確實に地歩を占めつゝあることを目撃する。それは、精神科學派のオーソリチー、デルタイの哲學の基礎の上に建設された文化教育學、言ひ換へれば、體驗の教育それである。而し、これは、自由教育主義、藝術教育主義と、その要求する所に於て、相違があるやうでもないが、自由教育は生命の奔騰のまゝに、勇敢に、躍進したもので、情熱が勝つて、理智はたゞそれにからまつたとも見るべく、また情熱に煽られた理智によりて、遮二無二押し進められたものであるとも見られる。故に、先にも述べた如く、可なり脆弱な點が多量にあつたのであらう。然るに、同じく動き出した生命が、一旦は奔騰をおさへられ、つまり情熱を冷して自由自在に、理智を働かし、理智、卽ち言ひかへれば哲學的根底の上に、用意周到に、過去をたかめ周圍を吟味し、精神構造を精査し、自に執せず他によらず、人類生活の中に我を認め、文化建設の生活を活くべく、活かすべく組織されたものが、この文化教育學で

なからうか。この見方にして大なる誤がないとすれば、自由教育を、整束整理されたものだとも言ひ得られるものである。現在は、自然に、極めて自然に、この潮流に合はさるべきものでなからうか。私は、私を追放した教育界が、あまりに目先がきかなかつたことをば、今、追憶を新にして、今一度、教育圈外から皮肉の笑を送る。

教育者よ。御身等の生命は、しかく、硬化し易いものたることを深戒されたいと申し上ける。

さて、日本の教育界は、惠まれたる教育界である。何故ならば、今日、世界の教育界の大勢となつた文化教育學は、日本に於て大成さるべき運命にあるのでなからうか。歐米の文化は、謎の文化である。目度のつかない文化である。文化の枝末である。分析的である。歸納的である。故に、歐米人には、文化の意義が徹底しない。然るに、日本には、根本文化がある。否、日本は、根本文化によりて、作られ、建てられたる日本である。日本

が見出した根本文化ではない。根本文化が掘り出した日本である。日本國體とは、根本文化である。文化教育學は、日本に來つて、點睛さるべき任運の約束によりて、歐米の思想界に芽ばへして、日本に輸入されて眞實の菓が結ばれるのだ。見聞の狹い私は、人格教育に躓いて傷つき、生命の凝視によりて蘇生し、人間生命の究極的表現たる日本國體の根本文化綜合文化に抱攝せられ、希望を新にして、生命の凝視即ち體驗によりて、根本文化の建設のための綜合教育を施すこと二年半、遂に、喜びを殘して辭し去つた。今、垣間越しに、文化教育の動きを見て、感慨無量である。而して、日本に於て、日本國體と攝合し、融接して、完成される任運の動きの中にある現下の國民教育者は、眞に惠まれたるものでなくて何であらう。

國民教育者よ、輕擧妄動を愼み、東方の教育を渴仰せしむるまでに努められたい。これ日本のためにのみいふでない。敢へて全人類のために申上けるのである。

八紘一宇
六合一都

の洪謨を空言に終らしむる罪惡は、千萬劫にも消えがたいものであらう。

七　生命凝視の教育

私は、こゝに、いよ〳〵、私の體驗からしぼり出された生命凝視の教育について申上げる。私は、このことを申上ぐるに、抽象的論斷をさけて、なるべく、事實に根據し、體驗のそのまゝ、いはゞ、私の生活記錄を以て讀者諸君にまみへる。

今の世の人は、殊には學校教育を受けた人々は、一般に試に一寸淺くさはつて見て、何等の苦勞なしに、直ちに我が胸の琴線に觸れるものでなければ、その物の如何なるものた

るみ問はず、價値を喪亡してしまうことを手輕にやつて除けては、探しまわる。現代は、感觸さへよければ價値の如何は問ふ所でない。私は、さうした人と接する毎に、詔臣の跳梁にまかせる君主の、忠臣の諫言獻策を片腹痛い氣分で排ける態度を思ひ合はされる。甘言には胸を躍らして迎へ、忠言をば、耳を塞いで避くる者ありとせば、それは丁度現代人の生活を象徴したやうなものである。すべて、手輕に感激を覺ゆるは、自らの所有する思想、感情、生活等と、相似的なるものに觸れた時である。よつて、その感激も共鳴も、格別な深さも、高さも與ふる所のものでない。我々どもの生活を深め、高める所のものは、一應は寧ろ感觸のないもので、凝視めによつてのみ、再應、または再々應と、次第々々に悦びに充され、感激を覺ゆるものでなければならない。手輕なものを漁る現代の風潮は、文化生活の上に、甚だ喜ばしからざる病弊である。濁亂もこゝから湧き出る。人間の性癖、欲望、本能、衝動といふものは、手輕に處理されべくも覺えない。處理されないから、性

癖と性癖、欲望と欲望といふ具合にかち合つて、濁亂を産む。現代は、眞に、末法惡世の證左あまりに顯著過ぎる程の濁亂相を呈してゐる。一度むいても、二度むいても、その爛習は除かれさうもない。なまぬるい投藥では、中和させることも叶ふまい。今こそは、擧つて生命の中心に、勇猛に突進するより外の手段が餘されてゐない。我等は、あらゆる緣をたどりて、生命を凝視めるのみが、自らを救ひ、社會を救ひ、人類を救ふ所以であることを思はねばならぬ。

私は、思ひかへし、繰り返し、生命の凝視といふことを述べつゞけた。生命の凝視といふことは、必ずしも座禪觀法といふことでは無論ない。自然を凝視め、自然の懷を自由自在に游泳するもそれである。人事を凝視め、それに融接するもそれである。己が一擧一動を省くもせず、凝視めをこらしては靜かに泣き、悲しみ、または悦ぶもそれである。兒童の童謠に見よ聞けよ。彼等は、最も自由に自然に、山と語り、河と談じ、月に物言ひ、花

に喜び、星と微笑む。一本の草木も皆彼等の生命と共に、或は寂かに、或は厳に、或は震ひおのゝく。彼等の見る山の雄大は、彼等の生命の雄大なる姿であり、彼等の感歎せる水の清澄は彼等の清澄なる生命の姿である。月のしめやかなるも、花の明浄なるも、皆彼等が生命の姿である。彼等の世界は、彼等の生命は、自然と手をとりて進み、而して次第に深まる。況して、人と共なるに於てをや。日蓮聖人が、「日本國の萬民異の苦しみを受くるは日蓮一人の苦みなり。」と太い吐息を洩らされたことは、生命の凝視が、社會人心を總て徹底して動き出す生命の姿である。我々どもは、あらゆるものを、あらゆる事を、あらゆる人を通して、我等の生命の凝視を徹底せしむることを活きねばならぬ。凝視が利きさへすれば、生命は動く、搖ぐ、底から搖ぐ。我等の體驗は、そこで足踏を踏み始める。箒を持つこと、箸を持つことの小事より、遊びであれ、職業であれ、やること、なすこと、なすこと、己が生命の相でないものはない。我々どもは、おのが力を餘すことなく、なすこと、やる

ことに生命の全幅を傾けて、それに凝視をこらせば、凝視は活きる。食も空しくなすべからず、遊びも徒らに過ぐすべからず。すべてが、おのが生命の相である。凝視を怠つてはならない。我等同志の間に、清淨偈といふ偈文がある。これは、箒を手にした時でも、雜巾をもつた時でも、その清淨の仕事を凝視する一つの作法である。また食法といふものがある。これは食事の際に生命を凝視める一つの作法である。今試みに食法偈の一節を抄錄する。

「……前略……

一米一粟、久遠の壽を保ち、一飯一食、佛恵命を續ぎ、長養増益して、法界の神となり、利用窮り無くして、群生を扶濟せん、食前食後、慈念充溢し、法喜禪悦、六合に周遍し、續種護法、徒食の譏無けん、涓水一滴も、天地の力を盡し、米粟一粒も、萬人の勞を收む、願くは此飯食、色心を莊嚴し、佛となり妙と爲て、學人を滿足し、……後略」

食事でも、凝視れば、法界を掩ふ生命の相があらはれる。お互に凝視をこらすべきでなからうか。

次に、私の嘗ての學童であつた或る少女の日記をあけしめられたい。

今日の遊戯！
本當に面白かつた遊戯。
私の方は、
負けても面白かつた遊戯！
何でおもしろかつたのだらう。
あせをながして……
遊戯をやつたことが面白い。

私の遊戯は、
力一ぱいの遊戯、
それが面白かつたのだ。
すみからすみまで、
力のはいつた遊戯、
私共は、
今日の今日まで、
この力一ぱいといふことを知らなかつたのだ。

私共は、
これほどの喜びを、

始めて知つたが、

油斷はせぬ。

油斷をすれば驕慢になるから、……。

兒童の眼は、かくの如く鋭く、そして清淨である。教育者は、稍々もすれば、この清淨にして鋭い眼に、目隱を打つて平氣で澄してゐることが多いのである。

教育者は、他事を要しない。この兒童の眼をいやが上に、明透に導けばよいのである。如何なる場合にも、曇らない眼、それは、自由なる生命の眼である。

更に、一少女の、比較考査の際の答案をあけしめられたい。

我が志望

私は、たゞ眞面目な生活がしたいと望んでゐる。世間に名を擧けて何になる。其人は

それがために、幸福だとは限らない。金が澤山あつても、あるだけではどうにもなるものではない。

金を欲する人、また名譽をのぞむ人は皆欲だ。今の人は皆さうだ。私は名譽もいらない。金もいらない。眞の生活に這入りたい。そして人の道を守つて行きたいと思ふ。

私の方の先生は度々いふ。人は、學校にはいつたつて、必ずしも立派になるときまつてゐないといふ。學校にはいらなくとも偉い人間になれないことはないといつた。昔から豐な家から立派な人の出たといふことは稀である。であるから私共は、學校に這入らなくとも落膽することはない。私は眞面目な生活にはいりたいといふことで一ぱいである。

私は比較考査のよしあしは知らない。けれども校長の命令によることでもあり、罪を冒すやうな心持ではあつたが命令のまゝに行つた。その一つはこれだ。私は喜んだ。彼女は、

生命の凝視を凝らした。遂に、生命のかゞやきを覚えた。そしてかゞやきのまゝに書き綴つた。彼女には、凝視むるより外何物もなかつたのだ。兒童は、さがし廻ることは下手でも、突き進むことは上手だ。一息、また一息と、たゆまず突き進ましめなば　全人類の光明慈雨たるべき使命のために、出現ましまされたる神明の護念洪謨に融接すること、將に一歩であるといはねばならぬ。然るに、これをば、危險兒として、審査外に置かんとの議さへあつたことを追憶し、現在の教育界を垣間越に見ては、隔世の感なき能はずである。凝視が利き、凝視る外何物もない生活を活きしむれば、如何な窮屈な境涯でも彼等には自由がある。強て、窮屈な所におかんとすることは愚であるが、腫物に觸るやうな心持で、彼等の氣分をこはさゞらんことを勉め、自由を與へんと焦る教育者は、却つて、彼等の自由を奪うものたることを考へねばならぬ。要は、生命の凝視めの自由でなからうか。自在無礙なる人格にのみ自由が宿るのでなからうか。

私は、更に今一つ、一少女の、其時の答案を擧げて論旨を進めたい。

予のすきな人物

私はK先生が好きです。

人間は、何のために生れて來たものだらう。爭ふために生れて來たものでもなからまさか、墮落するに生れたものではないだらう。

さらば、何のために生れて來たであらう。人は、道を守る生物だ。不惜身命の行をせねばならぬ生物だ。

然るに、世の中には、かゝる人はない。

全くないといふ譯ではない。K先生も居る。K先生は、何時も、道のすたれて行くことを嘆いておられる。故にその一人であらう。

故に私は好きです。けれどもだ〳〵好きだとはいひません。私も共に道を守らうと思ふから好きです。

私の學校は、文化の餘澤の、甚だ少い片田舍學校のであつた。殊に、この少女は、單級學校にも等しい、整はない學校から來て、私の學級に編制せられたものだ。私は、凝視めしめて、一年を通して來た。學年末が近づいて、比較考査の目的で題が出されたのだ。彼の一少女は、同輩と共に目を塞いだ。紙も鉛筆も淋しさうに、空しく机上にのつかつてゐる。彼の少女は、誰よりも長く、身搖ぎもせず、たまに、深い溜息をつくのである。同輩の中で、最もウブでか弱い彼の少女のその姿は、涙がさそはれる程のいぢらしさであつた。刻々に移る時を忘れたるもの〵如く、周圍のもの〵、運ぶ鉛筆の音さへも聞えぬかのように、靜かに搖がない。餘す所十分となないと思ふ時に、彼は、靜かに目を開いて、しづかに鉛筆を手にした。別に輝しい容姿でもない。無念に、たゆまず、靜かに書きつゞけてゐる。鐘がなり響いた。同輩と共に、彼の答案も、私の手元に出された。それがこれである。私の胸は躍つた。私の腦裡に、ウヨ〳〵してゐた私の教育私見が、どうにかかうにか、あるまとまりを形成したのは此時である。私のこの教育意見は、この時に産聲をあけたのである。

私は、試みに、これを解剖して見る。彼女は冒頭に於て、素直に歸結を提示してゐる。そして、轉じて、人生の意義について提言し、進んで、設疑法によりて、二個の反問を以てひそかに現代人の生活に一矢を酬ひ、更に、大膽に彼女自身の解決を述べてゐる。次に世相觀については、露骨に、道義の慨亡を斷じ、漸く求める人をさぐり得て一人を擧げ、その人をしてその人を說明せしめて、こゝに結論を全たからしめた。然るに、彼女は、これに止まらず、再轉して、單なる理具を排し、事行に移して、圓融の生活を成ぜんことをのぞんで結論をいやが上にも磐石のものたらしめたのである。

私は、この幼稚な作品によりて、思ひ設けぬ大歡喜を得たのである。

この作品は、形式から見ると正しく議論文に出來上つてゐるのである。而して、その推論に、一つの無理を認め得ない。彼女は、推論式を聞いた筈がない。聞いても、それを理會する能力の持合せがない。また、彼女は、この種の議論文めいたものを修練したことが皆無だ。彼女は、全く、修練も論式も超越して、すべてのとらはれから脫して築き上げたものである。これが、眞に、生命の凝視の賜物であらう。私はこれ等によりて、二つの大なる暗示を與へられた。

兒童は、凝視になれさへすれば、道德的に偉大な風格を成就することを得るのみならず、眞に、透徹せる理智の啓發せらるゝこと、全く疑ふ餘地がない。

私はいふ。生命を凝視める所、善も巢喰ふべし、眞も巢喰ふべし、美もまた巢喰ふことを論をまたない。巧妙なる術も法も、凝視をかいては所詮要なし。術あれば、それは凝視めしむる術であればよい。法ありとせば、それも凝視めしむる法でなければならない。

日蓮、當體義鈔に曰く

法性の妙理に染淨の二法あり、染法熏じて迷と成り淨法熏じて悟となる。悟は卽ち佛界なり迷は卽ち衆生なり。此迷悟の二法二なりと雖も然も法性眞如の一理なり。譬へば水精の玉の日輪に向へば火を取り月輪に向へば水を取る、玉の體は一なれども、緣に隨つて其功同じからざるが如し。一妙眞如の理なりと雖も惡緣に遇へば迷と成り善緣に遇へば悟りと成る。悟は卽ち法性なり迷は卽ち無明なり。譬へば人夢に種々の善惡の業を見、夢覺めて後にこれを思へば我が一心に見る所の夢なるが如し。一心は、法性眞理の一理なり、夢の善惡は迷悟の無明法性なり。是の如く意を得れば惡迷の無明を捨てゝ善悟の法性を本とすべきなり。」

世の敎化者の位置に立つものゝ、飽くまで味うべきことでなからうか。

善悪は迷悟による、迷悟は縁に隨つて生ずる。萬物は本來善悪あるべからず、人間の善悪も、たゞ縁の善悪によると思ふ時、憎悪も、愛好も、變じて慈念となり、佛陀、神明の護念忽ちに我が頭に堅く根づいて、不惜身命の心地を成ずるであらう。願業とはこれである。卽身成佛とても外ではあるまい。これが道德に約されて忠となり孝となる。日蓮聖人の、「世を安んじ國を安んずるを忠となし孝となす」との指南、また大なるかな。

世の教育者の多くは、兒童の縁に善悪をおかすして、兒童そのもの上に、たやすく善悪をきめつける。これが、私の提唱する生命凝視の教育には、最も恐るべき障害の一つである。何となれば、彼等が、信賴しないやうで信賴するものは教育者である。故に、教師によりて、善人の如く扱はれゝば、たやすく驕慢の雲をたなびかせ、悪人の如く扱はれゝば、深いあきらめのドン底に蹲し、何れも悪縁に躓いて、悪迷の無明を強からしむるのが普通である。私は、こゝで、教育の一面の意義を簡單に述べて見る。

教育とは、教育者が被教育者に善縁をば提供することである。そして私とても、かくの如く茫漠たる說述を以て滿足して居られない。さて、縁は廣汎である。無限である。教育者は、被教育者の有力なる縁であることは論を俟たないが、教育者が、如何に藥がいて見ても、それは、飽くまでも全部に對する一部に過ぎない。かう考へる時、教育といふものゝ效果は、情ないものになるのである。而しこれは通頭の解釋だ。こゝに至つて、別頭の法門を要することになる。別頭の法門とは、生命への一乘である。譬ふれば中心をつかむことである。要を射ることである。教育者が、若しも、被教育者をして、生命への一乘を脇目もふらずに、勇往邁進せしむる縁になり得ば如何。つまり生命の凝視を、ひたすらに徹底せしめ得る縁たり得ば如何。彼等の靈は、明澄透徹の眞如法體となりて、無限のあらゆる縁が、悪にもあれ、邪にもあれ、醜にもあれ、穢にもあれ、「世間の法に染まざること猶蓮華の水に在るが如く」に、善悟の法性を創造る善縁ならざるものがないといふことに

なるであらう。教育者はこの要を的にしての善縁となることが、第一義であることを深く思はねばならぬ。かくの如き教育が建設せらるゝとせば、「邪見愈々頼みあり」「教彌々高ければ位愈々低し」で、憂ふる何物もない。末法悪世こそ、眞に善縁たるべし。「佛の名を冠らしむるは凡夫なり。」とは、これでなからうか。私は、これについて、また一少女の日記をかれる。或日の日記に、

靜夜の　留守居のひまに　我が影を
　みつめてひとり　淋しめるかも

彼の女は、幼くして母を失つた。彼には二人の姉と一人の兄があつた。間もなく繼母が迎ひられて、弟が出來た。妹も出來た。何れの時にもあるならひ、兎角いきさつの絶間がない。彼等四人の兄弟姉妹は人知れず泣いたことであらう。相當の地位ある家なれども、一人の兄は、ひがみ切つて、遂に出奔した。そして行方が知れない。かゝる有

樣なれば、彼の女も、嗜い生活の中に、はけしいひねくれが增長してゐたことは、彼女の作品によくあらはれた。私は、一年の間凝視めしめた。何者でも、何事でも、すべてをして凝視めしむべく努力した。年も明けて日記を試みしめた。彼等の生活は、打つてかはつて素直にのびつゝあることを知つた。彼女は、父母弟姉が打ち揃ふて、入浴のために出掛けた留守居のひまに、靜かに自分の生活を味ひたことが、よくこの歌にあらはれてゐる。彼女の生活は苦痛でも、彼女の生命は豐かであることがこれによりてうかゞはれる。

　彼女には、既に繼母をうらむ心がなかつた。彼女は、繼母の正しい生活を念ずるまでに至つた。程經ての日記に、

父にさからう　繼母の口より　亡き母の
　惡口きけば　うらめしきかな

この「うらめしい」は憎むことでないではなかろうか。さもしい繼母の心の、ぬぐはれる

ことの一向の祈りでなからうか。何といふ清淨な、貴い心ばいであらう。さきの遊戯の實感をものした一少女、彼は孤兒であつた。叔母の家に養育されて、容易に見出しがたきほどの、巧な虚僞を活きたものであつた。私は、それやこれやを思ふと、「邪見愈々たのみあり」といふことに、大きい感激を持たずに居られない。よし、彼等の生活は、全く告白の如くでなくともよい。それは當然だ。多年の蕪習があとなく拭はれるといふことはない。けれども凝視めて止まずんば、遂には至るであらう。私は彼等のために祈る。今頃、彼等は如何なる夢を辿り居るであらう。夜はふけた。

八　生命凝視の教育の原理的根據

私は、前項に於て、私の簡單なる生活記錄を以て、生命凝視の教育の大體の輪廓及び極

く大ザッパに、其内容をうかがうに足る資料を提供した。私は、此項に於て、聊か原理的根據を述べて見たい。而しながら、組織體系には頓着しない。こゝでも、生活記錄といふ心持で申述べる。體系を備へた組織的論述は、他日別册として大成を期したいと思ふ。

日蓮、四信五品鈔に曰く

「流通の一段末法の明鏡なり、尤も依用となすべし。」と。凡そ佛の經典には一つの法則として序分、正宗分、流通分の三段がある。法華經にもこれあること餘經の如くである。序分とは、豫備段なり、正宗分とは提示段なり、流通分とは應用段である。さて、流通の一段、末法の明鏡なり、尤も依用とすべしと。こゝである。寶は庫にある。庫は、己れのものにならねばならぬでもよい。寶も己れのものにならぬでもよい。要は、寶が我々どもの役に立てばよいではないか。萬人、皆、この寶を自由自在に役立て得ればよいではないか。我々どもは、庫の登記も敢へて要しない。寶の移動登記もいらない。佛と我々どもとの間

に、完全な理解さへありて、必要に應じて、何なりと、何時でも、何等の制限なく役立てられるやうにしてさへ呉れゝば結構ではないか。理解とは信である。信さへ成立すれば、實は何時でも文句はない。それは、佛の慈悲は、無緣の慈悲といふて、何物にも、何事にも緣せらるゝといふことなしに、平等の大慈悲、遍く法界を覆ひ、任運に拔苦し、任運に與樂せしむる根本の大慈悲心であるから、一切の衆生との理解は、佛の方は氣遣ふことはない。こちらさへ信を起せばそれで理解が完成する譯だ。つまり衆生の信、これ一つで、一切の坩がくのである。實は、正宗分の庫におさまつてあるが、信により、自由自在にその寶を手がけてゐれば、最初は不案内でも何時分るともなしに分るのだ。つまり、學校に這入らないで、實地から仕上げるといふ格だ。學校といふ生活の準備場を通過しないで、直ちに生活で生活を贏ち得るといふ行き方だ。それが、「流通の一段末法の明鏡なり、尤も依用とすべし」といふ指南だ。「尤も依用とすべし。」と。これを見脫してはならない。

又曰く

「此中に、末法に入つて法華經を修行する相貌分明也。」

又曰く

「其中分別功德品の四信と五品とは、法華を修行するもの〻大要、在世滅後の龜鏡也」

四信とは、

法華經分別功德品に曰く、

「一念の信と解とだに生ぜば、得る所の功德は限量あることなけん」＝（一念信解）

又曰く、

「其言の趣を解するものあらんに、是人の得る所の功德は限量あることなくして、能く如來の無上の慧を起さん」＝（略解言趣）

又曰く、

「如何に況んや廣く是經を聞き、若しは人を教へても聞かしめ、若しは自らも持ち、若しは人を教へても持たしめ、若しは自らも書き、若しは人を教へても書かしめ、若しは華香瓔珞、幢幡繒蓋、香油蘇燈などを以て經巻を供養せんをや」‖（廣爲他說）

又曰く、

「若し能く、是の如く觀ること有らん者は、當に知るべし、是を深信解の相とは爲くと」

‖（深信觀成）

卽ち、初信は一念信解、第二信は略解言趣、第三信は廣爲他說、第四信は深信觀成である。今これをば、初信より漸次に、上に四信まで圖示せば

（初　信）　一念信解（信）

（二　信）　一念信解（信）　略解言趣（解）

（三　信）　一念信解（信）　略解言趣（解）　廣爲他說（說）

（四　信）　一念信解（信）　略解言趣（解）　廣爲他說（說）

かくの如くである。而して、第一信は、一念信解とあれども、此位は、信と以て主となすのである。

日蓮、四信五品鈔に曰く

深信觀成（觀）

「一念信解の四字の中、信の一字は、四信の初に居し、解の一字は後に奪はるゝ故也。若し爾らば、無解有信は四信の初位に當る。經に第二信を說いて言く、略解言趣と云々。」

これは、現世の人から見れば、一顧の價さへないことでなからうか。解なくして生ずる信は、妄信か迷信でなければならないと、一概に合點してしまう譯から見ては、どうしても顧られる事でない。解なき信、解なき信……幾度繰り返しても論理が合はな過ぎる。而して、我々共の生活にこれがないであらうか。解なき信……我等の生活にはこれがある。あるなどの段でない。生活その物はこれでなからうか。活きねばならぬことに疑を

持つものがあらうか。あれば、その生をもてあました結果の變態人である。而して人々は活きねばならぬことに、解が先驅では決してない。こゝが考へねばならぬ所だ。「火事だ、」應と起つて駈け出す。こゝが微妙な所だ。微妙あればこそ人生だ。これが、靈と靈とのうけ答へ。これでなくて人生の妙味が何處にある。世は末法の悲しさに、聲と聲とのうけ答へ、言葉とのおつき合、その淺いうすつぺらが世法といふものになつてしまつた。世の累はこの薄つ片ではないか。まさに立て直すことだ。人と人、卽ち靈と靈、生命と生命との感應融接。さもなければ、人類は、所詮、無駄をのみ活きてゐねばならぬではないか。

佛、第一信に、「一念信解」と立て、第二信に「略解言趣」と、解をば第一信より奪つて第二信におき、それも「畧」といふからには、解の芽生だ。それから第三信「廣爲他說」を經て、第四信に至りて「深信觀成」と結んで、こゝに於ても、信と離るゝことなく、信の家の解としてのみ解が成就するといふことだ。觀とは解である。深信觀成とは體驗であ

る。いかゞです。これでも妄信であらうか、迷信であらうか。「一念信解」の信のみならば妄信でもあらう迷信でもあらうが、迷信にも妄信にもなりやうがない。どうです。靈と靈生命と生命とのうけ答へ、ものはこれから出發するでなければならぬ。人生こゝより出發すべきであることを、末法解決の法華經、その尤も依用とすべき流通分の第一頁に於て明示された。釋尊が遠く末法現代のためにのこされたこの明訓。釋尊は、愚者ではなかつたでせう。並みの者ではなかつたでせう。現代の世相等と思ひ合せて、篤と考慮せられたならば、大きい肯きの出ないことはないであらうと思ふ。この四信を、我々どもの教育の上に移すこと、これが生命凝視の教育である。

信とは、「無疑曰信」、一應眞純と解してもよい。その方が分りよい。深い味識は、讀者の綜合判斷によりて活きることであらう。教育者も、被教育者も、生命の眞裸で打つかる所に信が成立する。論理とか、心理とかにさまたげらるゝことなしに、つまりそれ等を超越

して、生命と生命とが一つになる。その一つの生命を、教育者は教育者の眼で、被教育者は被教育者の眼で、凝視を凝らすのである。それで、四信が、順次に運ばれるのだ。そして、遂に第四信の體驗が得られる。若しも無理があれば、其間に躓きがある。そこに訂正があり。取消もある。妄信にも迷信にもならない。その間に、論理もはたらく、心理も活躍する。法も、術も、すべて活きる。第一信の信は、後から後からと解を産むのである。教育は、この呼吸であらねばならぬ。それでこそ、教育は教育でなくて生活となるのである。教育は教育であつてはならない。體驗でなければならない。

私は、更に一少女の日記を擧けて、四信の領解の參考に資したい。ある日、一少女から日記が提出せられた。彼の女は高等一年である。私はそれに緣せられて次の如く書いてやつた。

世の中を婆婆といふ。

婆婆とは、
不淨の世界といふことだ。
經に曰く、三界火宅と、
又曰く、恐怖惡世と、
又曰く、五濁熾盛と、
蓼食ふ虫は、
蓼の辛きを知らない。
世の人もやつぱりさうだ。

お前の眼が開いた。
外にのみ開い眼が、

更に内にも開いた。
お前の本心が、
深いねむりからさめた。
自我の光明が輝き出した。
……まだ〳〵淡いながらも、
火宅の中の人々をそのまゝにしておけるか、——しかし、

世の人々に、
目醒めしめやうとせば、」
受難が雨のやうに、
お前の五體に、

お前は、
それをも厭いませんか？

私は、
こればかりの仕事でさへも、
お前達の、
思はぬ難がふりかゝつてゐる。
私に、
近づきになつて呉れるな。
お前達にも、
私の難が……

けれども——
お前に、
覺悟があつたら近づけ。
おんぶしてもあげやう、
抱いてもやらう。

お前は、
大膽にならねばならぬ。
世間の法に、
とらはれてはならない。

もつと〳〵、
強くなつてからでないと、
後のことは言ふたとて分るまい。」
——やめやう——

こんなことは、高等一年の少女には、言ふべきことでないといはるゝであらう。無謀とまゆをひそめらるゝであらう。而し、私は、其時は、無謀とも何とも考へる餘裕がなかつた。ただ、彼女の日記を凝視めてゐる中に、私の靈はゆらぎ出した。私は、書かうとも思はずに書いてしまつた。彼女には、何のことかも分るまい。けれども彼女はふるへた。分らぬながらもふるへた。それは彼女の告白である。彼女は凝視めた。繰り返し繰り返し。
今日も明日も。そこに信が活いてゐる。解が後に奪はれてゐる。さてその後は……。

程經て、日記は、別册に移つて、私の手元に出された。第一頁に、

四月三日

今日、皆外に行つて、誰も居らぬのを幸、先生より書いて戴いたのを、あらためて讀んだ。今の世は、

三界火宅

恐怖惡世

五濁熾盛だと、

アヽ、何れも何れも、怖しいことばかり、」

アヽ、今の世は、そんなものかしら。

この世の中に、我は平然としてゐる。火の燃えさかつてゐる中に。このまゝに居らば燒け死ぬであらう。何といふ怖しいことだらう。一時も早くのがれたい。一時も早くこの

地獄からのがれしめたいのは山々であるけれど。

手や足を、少し火傷しても痛いつて泣くくせに、體全體、火中にありてこれに氣がつかぬといふことは、何たるまぬけだらう。まぬけとはこゝだ。それは心の方から見ないだゞ見ては、この世界は燒けては居らぬ。まぬけとはこゝだ。それは心の方から見ないからだ。

アヽ、一時も早くのがれたい。のがれしめたい。而しながら、あせつても駄目だ。どうしたらよからう。

日々反省して、心を清め、修養に修養を積んで、心の汚を去るのも一つの方法であらうか。又、人々をしてのがれさせるには、正しき道をふまねばならぬ。世の人に目醒めさせようとせば、受難の雨がふりかゝるといふた。私は、正しき道のための難儀なら、決していとはない。

この汚い體一つを、無上の貴い道と比べるなんて、もつたいないけれども。

我々どもは、どこまでも先生に近づく。先生は、正しい道の行へ主だから。

身命を投げ捨てゝも、正しき道はいとはない。人生僅か五十年か六十年、この短い月日を、うか〳〵過しも過す。不惜身命の行者となりて過しも過す。人間は道のために生れて來たものであらう。

道のために產れぬ位なら、產れぬがましだ。

そのためには、先づ大膽ならねばならぬ。先生は、いつも〳〵いつて下さる。大膽にならう。大膽にならう。

彼女の、このかざり氣ない、日記によりて見るに、淺いながらも、大體の領解を得てゐることが分る。これが、第二信の「略解言趣」ともいふべきか。すべて、凝視めた當座は、

何のことだかも分らぬでも、それが時過ぎて、凝視の無駄でなかつたことが、我々共の生活の上に數多くあることである。「忘るゝも、知識に値へば宿善還り生ず」といふこともあるが、知識とは、必ずしも人間に限るまい。善緣すべてこれ善知識である。第一信の信によりて受け入れられて、自我の中に蘊在してゐるものは、次第に形成せられて、緣にふれて現れるのが「略解言趣」でなからうか。信によりて受けられて、「略解言趣」の第二信におほろけながらも生じた解は、時と共に次第に廣められ深められる。彼女の其後の日記に、

四　月　廿　日

……前略……先生がこの學校の先生でなくなると。私は、夢ではないかと思ふと同時に、悲しみがこみ上げて來て急に泣いた。本當に、これが夢であつて呉れたらどんなにうれしいことだらう。私は泣いた。このことを聞いた友達は皆泣いた。このことは本當であつた。そして、先生は、居ない後々の注意をして下さつた。

先生は、不惜身命の行者だ。正しい道の行ひ主だ。これをはけしくやれば、先生の身の上に、大難が當つて來て、先生は、國中追はれあるく。これが別れかと思へば、泣かずに居られない。……中略……

あゝ、先生の、正しい道の門出だ。私共は、どうして泣いて居られよう。喜んで祝さねばならない。先生の、今、おつしやつたことは、忘れないで、心にきざみつけて行ひます。先生どうぞ御安心下さいと。心に念つてまた泣いた。……後略……

四月廿四日

あゝ、私共にも難儀があたつて來た。アゝ本當にうれしい。だけれど、私共の難儀は、本當に小さい難儀……中略……

今日の緩方の時間に、「明日の日曜をいかに過さんか」といふ題を、校長先生から出された。私は、先生の居つた時のやうに、目を閉ぢて座つた。まとまらない。私ばかりでな

い……。

校長先生は、早く書けといつた。私共は、まとまりませんといふ。校長先生は、まとまらないまとまらないといふて何をまとめるのか。私共はだまつた。其中にNさんが出しました。校長先生は、それを讀んだ。Nさんは、心のこと、または、道に關することなどを書いてあつた。校長先生は、だん〳〵讀んで行く。「おゝ、道のことばかりになつて來た な、なか〳〵熱心家だな」なんて、あざけるやうにしていふた。そればかりでなく、いろ〳〵なことをいふて笑つたり、おこつたりして居た。私共は、校長先生が、道といふことを知らないからだなどと、小聲で惡口をいつた。校長先生は、讀み終りて、Nさんに、なぜそのやうなことを書いたかを聞いて見るから、教員室に來いなどゝいつた。私等は、馬鹿な先生だなあとも思つた。私は、これからは日記の方にのみ本當のことを書いて、綴方には、ウソをならべて、よい加減のことを書かうとも思つた。

家に歸つて、よく〳〵考へて見ると、さつき學校で考へたことは善くないことだ。さうすれば、心は二またに分れる。心が、二またに分れるといふことはよくないことだ。やめやう〳〵。こんなこと。私共は、どこまでも道のために活きて行くのだ。今日あつたことも、一つの小さい難儀であらう。私共も、難によつて自分の力をためすことが出來るやうになつて來た。これも先生のおかげである。

私は、彼女の領解が、日と共に、次第に深まりつゝあることを認めるものである。

次には、第三信の「廣爲他說」、これは、小供の世界にはなか〳〵に求め得ないことである。けれども、この生活の稍々にじみ出てゐる日の彼女の日記を探つて見やう。

五月十四日

今日は、一番樂しい日であつた。私共にとつて、最も力強い日であつた。外は、雨でもや〳〵して居たが、私共の心は、晴天のやうな日であつた。私共、級の人々は、今日、

學課を終へてから、皆集つて心を打ち開ける會を開いた。私は、本當に、皆を力強く思つた。このやうでは、何も落膽するに及ばないと思つた。私は、うれしくつて〳〵、小躍りしたいほどであつた。何がうれしいたつてこんなうれしいことはない。今までは心を打ち開けぬ人も、今日は皆うちあけた。そして、今日は、誰に、何を言ふてもおこらず、平かにうけとつて呉れる。そして色々と相談をした。先生と、お別れした時のことを忘れぬやうに守りませうと、皆で誓つた。又そろ〳〵と忠告もした。今日の皆は、一點のくもりなき皆、力強い皆であつた……後略……

少女の世界の「廣爲他說」、それはこれ位の所であらう。而して、この悅びと、この力の漲つた生活は、これによりて、彼等相當の體驗を成じたからであらう。解は、次第々々に實る。若しもこれが、信から離れでもしたら、遂に崩壞を免れぬであらう。信の家の解としてのみ體驗が得られるのだ。第四信の「深信觀成」とはこの體驗である。而して我々ども

は、縁によりてのみ展開されることを忘れてはならない。縁は雑駁である。この雑駁な縁を、悉く善縁化する永遠の威力ある縁を與ふることが、教育といふものゝ全意義でなからうか。

法華經壽量品に曰く

「我、佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり、常に法を說いて無數億の衆生を教化して、佛道に入らしむ。爾しより來、無量劫なり。」

若し、この永遠の生命を知らざれば、四信も要なし。永遠の生命より流れ出た四信であるのである。

信とは、一切を拂ひのけての、生命と生命との抱擁である。融合である。讀者、或は、これをば、凡夫の我々どもには、一片の空想に過ぎない贅言といふであらうことを憂ふるのである。これについて、また、一考を煩はしたい。「鳥は鳴けども涙を流さず、日蓮は泣

かねども涙ひまなし。」と。これである。涙である。この涙である。涙さへあれば憂ふるに足らない。この涙こそは、凝視めて凝視めて凝視めつめて突き當つて噴臍した生命の泉でなからうか。凝視めさへすれば凡愚も聖賢もあるべからず。邪見も正見も問ふを用ひずだ。教壇に立つてたまに間違つてもかまはない。質問に答ふことが出來ないことがあつてもさまたけにならない。時に約束をたがへることがあつても仕方がない。再々の不心得さへも致方がない。若しこれをきらつては、教壇に立ち得るものがないではないか。よしにも、悪しきにも、教育といふことが、人類から奪ひ去らるゝからである。人間悉くが凡夫であるからだ。私の生命にかけての願は、たゞ眞實であることである。それが願ひであればよい。教壇上から、兒童に向つて、涙を以て語ることが出來ればよい。滅罪のために勇ましく踏み出すことが出來ればよい。兒童に、泣いてもらへればよい。兒童に我が罪を償うてもらへればよい。我々どもの凡愚であることが何で悲しからう。

法華經　觀世音菩薩普門品に曰く

「佛無盡意菩薩に告げたまはく、善男子、若し國土に衆生あつて、佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩卽ち佛身を現じて爲に法を說き、辟支佛の身を以て得度すべきものには、卽ち辟支佛の身を現じて爲に法を說き、乃至……長者の身を以て得度すべきものには、卽ち長者の身を現じて爲に法を說き、居士の身を以て得度すべきものには、卽ち居士の身を現じて爲に法を說き、乃至……婦女の身を以て得度すべきものには、卽ち婦女の身を現じて爲に法を說き、天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、伽樓羅、緊那羅、摩喉羅伽人非人等の身を以て、得度すべき者には、卽ち皆之を現じて爲に法を說く。……乃至……無盡意、是の觀世音菩薩は、是の如き功德を成就して、種々の形を以て諸の國土に遊んで衆生を度脫す。」と。

これは、煩をさけて、大いに略したが、有名な觀音の三十三身を示したもので、觀音の普

く身を現じて、衆生を度脫する所の普門示現、化他の流通が觀音普門品の全意義であるが。これこそ、教育にたづさはると否とにかゝはらず、大いに味はうべきことでなからうか。我等凡愚は、或は、阿修羅の姿、人非人の姿を時に現ずるとも、これ或は、觀音の衆生救濟のための示現ならずとせず。若し、觀音の示現ならずとも、示現とせば如何。凝視めて凝視めしめて、教育者は觀音の示現とせしむるが眞の教育ではないか。凡愚何ぞおそれんだゞ凝視を利かしむればよい。「信の一字を以て詮となす」ことに於て何かあらん。信なる哉、信なるかな。涙は、信に咲く華である。またある一事を語る。

私は、或る年、准教員準備場の或る學科を受け持たせられたことがある。或日のこと、鐘が鳴つて、多くの職員がゾロ〳〵と出て行くのと入れ違に一女生が這入つて來て、私の机の前に立つた。五體悉く萎れて見えた。彼は、既に涙を催して居る。彼女は、問ふがまゝに、大要次の如き告白をした。「私は、某（男生）から手紙をもらひました。それは、か

うした事柄からです。前日、同僚が、看護番との間に、いきさつをかもしました。最初、私は其場に居りませんでした。私の其場に臨んだ時は、罵詈の言ひ合にまで激して居ました。事の内容を聞くと、私の不注意から起つたことでありましたので、私は、その事の顚末を述べて、一同にあやまりました。看護番は、調子はづれしたきまりわるさに、それでも、捨てせりふを殘して其處を去りました。そして、今日、私に、わびの手紙をよこされたのです。これはそれであります。」といひ終つて、その手紙が私の机上に置かれた。それはなるほど、前日の詫びの言葉ではあつたが、よろしからざる芽生がありく〳〵と讀まれる。私は、目をつぶつて、考へるともなしに考へに耽つた。彼女は、また語をついで、その手紙を、同僚が潜かに見て……」と、すゝり泣きして、また漸く、「私は、同僚から、餘り激しく嘲笑されるので、共に居堪りません。私は、悪うございますが……先生どうぞどうにかして下さい。」と泣きくづれて居る。私は、彼女を、きつくたしなめ、且つ、慰

め、連れ立つて教室に臨んだ。私は、教壇に立つて、

「此時間は、教授を進め得ないほどに私の頭は狂つてゐる。」

と一言發しただけで詰つてしまつた。其中に何とはなしに涙ぐましい心持になつた。如何に繕ふても、涙が頬を傳う。机上に、一滴また一滴と落ちた。アゝ、女々しい、これではいかんと、あせればあせるほど、涙を堰きとめ得ない。遂に、涙を押し隱すことを得せなかつたのだ。そこで、よし。この以上は、泣かば泣け、區々たる情に囚はれてはならない。我は虚僞であつたかと思ふと、あせりがやんだ。涙だけは頻りに出る。

「お前達は、胸に手をあてゝ靜かに考へなさい。」

と、夢の如くに叫んだ。つぶつた眼からは涙がやまない。彼女等の、一齊にすゝり泣く音が聞える。

「お前達は、Kさんを嘲るより、お前達自らを嘲ろ……よしKさんに嘲けらるゝ魂ありと

もお前達の靈の中に、嘲けるKさんの魂のやうな魂がないと思ふか。女の德は優雅と同情とを缺いてはならない。Kさんが、斷崖の上を、ふら〳〵してゐることを、面白ろおかしく、遠目に見てゐるといふことがあるか」

ほつり〳〵、夢心地に述べた。彼女は、

「先生、ありがたうございます……」

と、いひも終らぬに、机に伏してゐた。彼女等は泣く。私は、最後に、

「よく、落ちついて考へなさい。」

と、いひ置いて、漸く時間の半ば過ぎる頃、教室を立ち去つた。

しばしありて、彼女等は、連れ立ちて職員室に來た。たゞ泣いてゐる。私は、別室に連れて這入つた。

女生一「私は、自分がどんなものとも……考へなかつたのです。」

女生二「漸く自分を見ることを覺えました。許して……」

女生三「許して下さい。」

女生多勢「許して下さい。先生どうぞ……」

皆、打ッ伏してしまつた。泣きやまない。私は始末に困じ果てた

「私は、お前達を責めはしない。それでは分らぬ。晴々しい心で相對しなさい。」

といふと、彼女等は、漸く身なりを繕うて座に坐つた。私は、ゆつくりした調子で、次の如く話した。

「お前達は、私を窮屈がつたやうだね……その筈だ。お前達の生活のよくない所を凝視めて居たから。」

女生一「おつかない先生でありました」

外のもの「本當に……」

此時、私は、思ひがけないことを、彼女等の一人から問ひ質された。

「先生は、なぜ、私達の悪い點を、今までいうて呉れませんでしたか」

私は、躍り起つた心持で、次の如く答へた。

「朝寢坊は、起されゝば起されるで、却つて床のなかにもぐりこむ。お前達も、そのやうなものだ。何か、緣がないと、言ふたとて所詮駄目ではないか。」

というて聞かせた。彼女等は肯いた。一週たゞ二時間の彼女等との接觸しかもてなかつた私に、彼女等は、かくの如く隔てがなくなつた。淚である。淚は、信に咲く華だ。

讀者諸君、私は、可成長い、拙ない告白を繰り返した。けれども、これはこれ、すべてが、私の生命凝視の教育を、打ち起てるまでの經過である。法華經の四信は、法華經のみのものでない。これを我が身の上の法門、卽ち、生活の上に讀むことこそ正しい見方ではなからうか。

日蓮曰く

「如是我聞とは、我が身の上のことゝ讀むことなり。」

の指南により、私は、四信をば、教育生活の上にかくは讀んだのである。すべてが、我が身の上のことゝ見るにあらずんば、世界を覆ふほどの知識を以ても、それは我が寶でない。我が身の上のことゝ見ることが、それが生命の凝視である。我は、この了解に促がされて、更に、綜合教育論を打ちたてゝ日常の實際面について述べようと思ふ。

後編　綜合教育論

一、綜合教育といふこと

私は、前編に於て、生命凝視の教育について、私の未熟な了解を告白した。これからその實際面について、私の教育經驗そのまゝを、綜合教育論の名のもとに告白を進める。

人間の生活樣式は、全く以て多種多樣である。しかし、それは生活樣式の多種多樣であつて、決して、生命そのものゝ多種多樣ではない。生命とは佛性なり、佛性とは法性なり法性とは眞如の一妙理である。この法性の妙理を、悟れば佛界なれども迷へばこそ衆生で

ある。生活様式の多種多様は、決して、一妙眞如の法性、卽ち生命の多種多様を語るものではない。こゝだ。迷を迷のまゝに容與しておいてよいものであらうか。さて萬事解決の鍵は、時があつかつてある。春は花咲き、秋は木の實熟る。時の鑑定が大事の中の大事だこれを誤つては砂上に樓閣を築くよりも猶大きい無駄である。釋尊は、在世四十餘年にして法華經を說き、滅後は、二千年の後の鬪諍堅固、白法隱沒の末法・法の滅盡の時を期して、この大白法を遺された。それが、「生命への一乘」の大敬命である。あらゆる諸經の綜合經典である。綜合生活とは、迷を迷としてきらはず、迷を迷のまゝに容與もせず、迷の堅壘を本據とし、生命への直接行動を開始することである。而して生命の殿堂を拔くことである。迷をきらつては、足場がない。迷を容與してゐれば、世は混沌に混沌を重ねるのみだ。綜合教育論の提唱は、この綜合生活をば、教育の上に活現することを期するためのものである。然り、綜合教育論とは、教育を以て、人間生活の準

備などと、まだるい考へを排して、生命凝視の綜合生活を活きる生々しいものであることを第一に申上げる。

御義口傳に曰く、

「品々の初めにも五字を題し、終りにも五字を以て結し、前・後・中間　南無妙法蓮華經の七字なり。末法弘通の要法たゞこの一段にこれあるなり。これ等の心を失つて要法に結ばずんば、末法弘通の師には足らざるものなり。剩へ日蓮が本意を失ふべし。」

五字とは、妙法蓮華經の生命である。南無妙法蓮華經とは、生命の凝視である。人間の生活は、生命の凝視を離れては、遊離の人生に墮するであらう。人生の振出も生命も凝視である。上りも生命の凝視である。中間過程も生命の凝視である。前後中間南無妙法蓮華經とはこの義でなからうか。これ卽ち、迷の境涯である所の相對的、隔歷的な、衆生の立場から、求心的に、絕對にして圓融せる佛界への驀進である。綜合生活への大號令である。

徒らに、とめ度なく、分科的にのみ進展をつゞけて、いよ〳〵ます〳〵混濁惑亂を產むことを以て、文化と心得てあやしまざる輩への大警告である。眞の文化は、分科的な足場を得て、綜合的に建設さるべきものでなからうか。重ねていふ。綜合教育論とは、教育といふこと、それが、綜合生活であらねばならないといふ主張である。

二、綜合教育論の原理的根據とその輪廓

私は、更に、煩しさを排して、短刀直入にいふ。生命とは一念である。凝視とは、三千の諸法から一念にたどりつくことである。それを活きることが卽ち綜合生活であつて、その綜合生活の足跡を教育の事上に印することが、綜合教育である。

さて、諸法三千の組織の、楔子とも、機能ともいふべきは、互具の法門である。互具とは、

は、十界の互具である。佛說に從へば、人間生活の、善惡果報、品等差別を十種類に分類して、低きより次第に、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界とするのである。而して、互具とは、これ等の佛界にも餘の九界を具し、乃至地獄界にも、又餘の九界を具するといふことである。かくの如く、十界互に具するが故に、十界卽百界となるのだ。若しも、この互具がないとすれば、社會も、國家も、世界も、擧げて解體しなければならない。人各々の間に、感應なく、理解なく、隔歷のみありて圓融なく、混沌のみありて統一なく、宗教も藝術も、政治も教育も、組織も統制も、遂に、夢幻のまゝに終始せねばならぬ。互具なき法門は、甘露の味ありと雖も、砂を交へたる食の如きものであらねばならぬ。互具あればこそ、三千も成立するのである。

日蓮、總在一念鈔に曰く

「仍て、無間地獄の衆生も、三千を具する妙覺の如來と一體にして差別なきなり。是を以

て、提婆（極悪の人）が三逆の炎、忽に天王如来の記を蒙り、地獄すら尚爾る也。況や餘の九界をや。」

十界互に具して百界となる故に、宇宙も世界もあるべし。百界各々に十如是あるが故に、千如是となりて、法界も流轉もあるべく、この千如是、三世間（國土世間＝即環境、衆生世間＝即個的生命、五蘊世間＝即以上世間の要素的原質）に亘りて、三千となる故にこそ法界一體圓融の實相觀を遂げて、我身本覺の如來なることを覺られるであらう。

私は、今、三千諸法をば、人類によせて了解を告白したが、宇宙法界、森々羅々、萬物萬象悉くが、互に相交易連繫、外には差別の相を示せども、內には差別を沒して一體圓融の平等の一念におさまつてゐること、これが所謂諸法實相の哲理である。この三千成立の根底をなすものは互具の法門であるのだ。互具すればこそ綜合も可能である。生命も躍如としておどる。進んで鼻をつくこともなければ退いて谷まることもない。自由はこゝから

巢立する。無明の雲が晴れる。法性の月がかゞやく。窮屈といふ影は地上から消える。

そこで、私は、これから互具の法門を頭にいたゞいて教育の實際に踏み込んだとする。教授あり、訓練あり、養護がある。これ等は、教育者にとつても、被教育者にとつても、各々ちがつて生活樣式であつても、それは、各々孤立した生活でないことはいふまでもない。さて、學校經營の實際について見れば、教授、訓練、養護の三作用は、稍々劃然たる分野をもつてゐる。而して、これは、至極當然のことである。然しながら、教授の分野にも、訓練及養護を閑却してはならない。訓練の分野に處するにも、教授及養護を粗略にしてはならぬ。養護の分野に身を置いたとて、教授及訓練を忘れるやうではいけないものは窮屈であつてはならない。要は、生命の凝視を極度に活きしむべく、そのためには兒童の生活に、深い接觸を保つて、教授中と雖も、見逃しがたき緣につき當つた場合は、訓練の作用なり、養護の作用なりに、仕事を轉換することに躊躇してはならない。そのた